

ぶどうの木

第 13 号

目 次

巻 頭 言	榎 本 利三郎	1
牧 師 館 訪 問 記	取 材 班	2
主の救いと旧牧師館の思い出	池 田 みさお	10
主は今も支え給う	池 田 みさお	13
父と子の祈り	古 野 とみ子	16
玄海の孤島で	津留崎 浩 行	17
苦しみに会いたりしは	石 田 秀 子	19
うべわれよき嗣業を得たるかな…	高 木 ツルエ	22
詩「神様ありがとう」他4篇…	野 口 米 子	24
さ ん び	伊規須 太 郎	30
神の手の中で	塚 本 敏 子	35
あこがれ、ミレーの晩鐘、祈り ..	野 口 米 子	36
信 頼	岡 嶋 ミヨ子	38
わたしの愛のうちにいなさい …	小 松 南 子	41
手術を受けて	久保田 宮 子	46
詩「レプタふたつ」	首 藤 正	47
シロアムの池にて洗う	岩 井 芙美子	51
ある日 或る時	伊規須 泰 子	55
背 広	正 野 真 宏	59
主イエスを信ぜよ	原 田 駒一郎	61

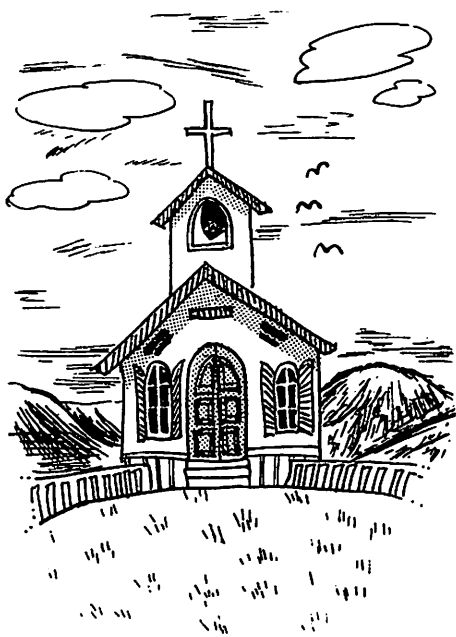
八 幡 前 田 教 会
大 濠 公 園 教 会

卷 頭 言

榎 本 利 三 郎

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

(ヨハネ 15・5)



基督伝道隊福岡基督伝道館が神様の格別なめぐみに依って設立されて五四年。その間に様々な嵐や、吹雪や日照り……と試練や霊的危機等々に襲われて参りました。然しぶどうの木である活ける主につながった、この小さな枝を、守り、養い、支えて今日に至らせて下さいました。此の枝から八幡基督伝道館が芽生えて参りました。又その枝々に多くの実を結ばせて下さいました。もう主のみもとに沢山の実がとり納められました。

今此の二本の枝に実のつた、めぐみ豊かな多くの果実を、皆様と共に味わい、主のめぐみを噛みしめて、更に多くの果実を結ばせて頂き度く願っております。

牧師館訪問記 (三)

―「ぶどうの木」取材シリーズ―

一、はじめに

早いもので、牧師館訪問記も三回目を迎えました。

第一回が学生時代の入信から献身まで、第二回が修養生時代のことでした。

これまでをふりかえてみると、神様が不思議な摂理をもって先生を神の器として招し、そしてそれにふさわしいものとするために、いろいろな中で訓練し備え給うた時であったと思います。

そして今回は、時満ちて八幡に遣わされた時からであります。

世は正に軍国主義が台頭しつつあった昭和十四年十一月三日、この時から先生の公けの伝道生活が始まりました。御歳満の三〇才。奇しくも主イエスが公けの生涯に入られた歳と同年代であります。(そう言えば、長身で額が広く、面長のところも似ているような気がしますね。)

それから四十二年経った月も同じ、十一月のある日の夕方、勤め帰りのサフラン会のメンバー(中には自称組も混っている

ましたが……)が牧師館に集まりました。

前回までは榎本先生が中心でしたが、今回は百合子奥様も話しの中に入っていたどきました。それは八幡前田教会の歩みは御二人の歩みでもありますし、それにお話の中心が御二人の結婚のことであったからであります。

美味しいお菓子をいたゞきなながら、若い兄弟姉妹は目を皿のようにして聞き入っております。それは心の中で蜜のしただりのように感じられたにちがいありません。

(文中 ―○○○― の部分は、取材班がお尋ねしたところです。)

二、八幡駅に降りたって

先生・八幡に着いた時は、足がガタガタでした。と言うのは、自分に力がないでしょう。自分に力がないことを一番知っているのは自分ですものね。それにこれから御用するところは年配の人ばかりでしょう。人生経験豊かな人達ばかりなものだから、そういう人に向って何が教えられるだろうか。本当に足がすくむような思いでした。

― その時、お年はいくつでしたか。―
先生・教えの三十一でした。結婚した時が教えの三十二で

したから。前にもお話したとおり最初河本さんのお宅で家庭集会をしていたんです。その家庭集会で皆さんが恵まれて、ぜひ八幡に専任の先生を送ってほしいという事で、私が来ることになったのです。それで私は河本さんの家しか知らないものですから、八幡駅に着いてから、直接河本さんの家に行ったのです。

そこで夕食もご馳走になり、お風呂まで入れて頂いて「先生こちらですから」と、もう一度今の八幡駅のところまで連れていってもらったのです。当時、河本さんは長者町にいて、八幡駅前の所が大正町といっていました。その八幡駅の東側に青果市場があつて、その前に河本さんの工場(倉庫)がありました。その倉庫は新しく建てた二階建てで、二階に上ると左側に漬物を干すテラスがあり、右側に二世帯住めるアパートになった所があつたんです。

私はそこに迎えられたわけです。入ってみると新しい壁、新しい柱、新しい畳でね。新しい畳の香りがプンプンしていました。炊事場には新しい水屋が置いてあるしね。お茶もハシも何もかも揃えてありました。炊事場は隣と共同でした。お隣りは河本さんの所に勤めておられる方が住んでいたのです。それでね、水屋の中にはイリコまで入ってい

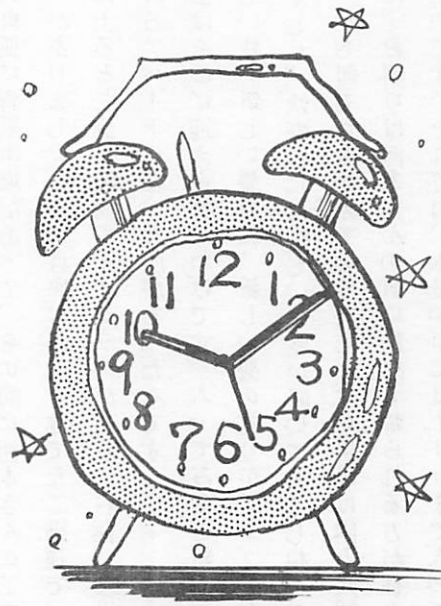
て……、何もかも自分でしないといけないと思つていたので、そんなところまで今の河本さんのおばあちゃんが用意して下さったのです。ですから印象に残っています。そこで自炊生活を始めました。

今、福岡におられる城さんが高見町におられて、その家庭集会で私は救われたものですから挨拶に行きました。城さんの奥さんが「榎本さん、自炊するとね、おひやができて困るし、なかなか男世帯ではできないでしょうから、支那鍋を買つて焼めししたらいいですよ。」と教えて下さり、支那鍋も、それから中華ナベのサジ、サラダ油も一罐つけて買って下さったのです。

それからやってみると美味しく好きでね。毎日毎日して食べてね。みそ汁と焼めしでしたね。みそ汁をつくると何日もあるから昼はおじやにしてね、食べたものです。お漬物は河本さんにいたゞいてね……。

一年間の自炊生活で料理も大分覚ええましたよ。だから、終戦当時今本さん(今の中村さん)岩隈さんが学生時代に牧師館にやってきました時に、私が手造りのうどんをご馳走したことがあります。その味が忘れられないと……。

そういうことで自炊生活をして、朝は福岡でしていたよ



うに、遅くとも五時には起きて、屋上の間に上って座布団ひいて、星をながめながらそこを祈りの場所にして、それが楽しいひとときでしたね。それが済んでから六時まで河本さんの所で早天祈禱会をして、それが済むと河本さんの奥さんの手作りの朝ご飯をご馳走になっていました。ひとりですし小さな家ですから掃除もすぐかたづきます。時間ができると信者さんの家へ訪問に出かけました。それから皿倉山や帆柱山へお祈りに行きました。信者さんといっても五、六軒ぐらいだったかなあ。早天

祈禱会も河本さんのところの従業員の方が五、六人ぐらいで、礼拝はそれに城さんのところが二人、それから吉永さん（病院長の奥さん）、若松からおばあちゃんがいらして新見さん、新原さんが加わるんです。日曜学校に今の河本信生さん、高橋英雄さん悦雄さん、畠山栄子さん。日曜学校の一期生ですね。

— 先生、その頃の頭はどうだったんですか。 —

先生・坊主だったね。丸坊主だったから結婚式の写真もツルツル坊主……。

奥様・早天祈禱会には、羽織はかまでしたね。

先生・あの頃は着物だね。日本男子だから……（爆笑）今の復興道路が狭い道で、そこをね、八幡駅のところから毎朝通ってくるんですよ。

— はきものは？ —

先生・下駄でしたね。

奥様・カバンの中に、はな緒が切れていのように皮を入れていましたよ。

先生・その頃カバンあったかな。カバンは欲しくても〇これ（お金）がなくてね。たしか風呂敷じゃなかったかなあ。カバンを持つのが長い間の夢だね。

— また話しを前に戻して申し訳ないのですが、八幡駅に着いた時足がガタガタされたとの事。その気持はよく解りますが、その時力となった御言葉を覚えていらっしゃいますか—

先生・はい、それはね、やはり、私の生涯のメッセージとして与えられたイザヤ書四十三章「今より我は主なり。我行わば誰かこれをとどむるを得んや」でした。この八幡に来たのも、私が来たくて来たのではなく、主が行けと言われたので来ました。私の主人が共におって下さるから大丈夫……。頭は大丈夫とわかっている、なかなか心はそこまではないかなくてね。

しかし、その御言葉で足のガクガクもピシッとおさまったわけなんです。これから先は蛇が出ようと何が出ようと構わんと思ってるね。

河本さんが主の愛をもって暖かく迎えて下さったから、それからくつろいでね。河本さんは、まず主を第一にするという姿勢がピシッとなさってましたね。だんだん統制になって、八幡漬物組合が合同して一つの有限会社になって、事務所が大正町の一角にあり、社長の椅子の後に社訓というのがあって、その第一句が何と書いてあったかとい

うと「神を第一にする」です。あれは素晴らしかったなあと思いますね。

三、結婚問題

それで、初めの一年は特別な事はなかったですね。そして四月頃ですかね。折滝先生から牧会をしようとする者は一人じゃいけない。結婚しないといけない。誰か知っている人がいるのか。」と言われて「いない。」と言うと「そんなら僕が世話してあげようか。」「はい。お願いします。白紙でおまかせします。」

今思えば無茶なようだが、献身者だからね。神様の導きならどういふ人でもいいんだ……私はそういう気持ちでね。とにかく神様がこの人と生涯を共にして使命を果せとおっしゃるならそれでいいんだと、そこまで何もかも神様第一にしてという気持ちだったんです。

そしたら家内をね、「この人はどうか。」と言われました。

奥様・私のくの方で父が亡くなって母が一人になったものですから、くにに帰らなくてはいけないくなり、学校は福岡でしたんですが卒業してくにに帰ったのです。遊んでいる

よりはという事で、二年半ほど代用教員をしていました。
三年半ぐらい五島にいましたね。

— 先生は、その時はまだ修養生をしておられたんですね。—
奥様・はい。修養生でした。外に広い畑があるんですよ。その畑を開墾しているんですね。そして肥しをかけたたりね。

(笑い)

掃除をする時は調子はずれの声で歌うでしょう(笑い)
私の弟がね「あの人は明専(現在の九州工大)を出てるらしいけど、ちと変人だろうね」とそんな事を話していたのです。コソコソとね(爆笑)。そうしたら、その変人と結婚しようとは思いませんでしたがね(爆笑)、本当に神様は……。

— くにの方は村全体が真宗で私の母もお寺の出なのです。私一人そこでイエス様を信じていくのはとても不可能と思いい—十八才の時に洗礼を受けているのです。そこには教会も何もないものですから、もう細々とした信仰でしたが一人で祈っているわけなんです。

— そういう時に村の人から縁談がありました。教会もありませんし、信仰を持ち続けられなくなりますので、そうすると体は生きていても私の魂は死んで生ける屍となります。

— 博多に戻られて何年目ぐらいですか —

— 私を導いてくれたのが末永の伯母なんです。伯母は、私がね、そこまでイエス様を信じているんだしたら神様を畏れる人が与えられる様お祈りしましょうねという事で、毎日のように伯母が私のために祈ってくれました。それですから、私が信仰をもって行く事ができさえすればという気持ちがあったのです。そしてたどこでもいいと思いましたが、そしたら神様がこういう道を開いて下さったのですが、本当だったらそんなに祈っているのですから「はい」とすぐに行けそうなものなのに、肉の思いがワツと迫って、イエス様、私は祈っていたけれども伝道者にまでは……というわけですよ。

— 博多に戻られて何年目ぐらいですか —

四、信仰の戦いと決心

奥様・とにかくそういうお話ですから、エス様が与えて下さったと思うはずですが、伝道者という事がワツノとのしかかったのです。

その当時、伝道者というものは「赤貧を洗う」そんな生

活をすぐ思い出すわけですね。そういうことに私が耐えていけるだろうか。私にはできません。そんな気がいっぱいでした。

それともう一つは、伝道者の妻がどんな信仰を持っていなければならないか。自分の信仰はよくわかっているし、エス様には信じていきたいけれど、伝道者の妻としての信仰は持っていないし、これは本当に困った事になってしまったと思つてね。

あれも心配、これも心配。まず生活の事がね。また、自分自身のことでも心配。その上主人を知りませんしね。今の若い方々のように愛していますとか言えばね（笑い）何もかも放り投げていくこともあるけど……。ちよつとむづかしい人のようでもあり、変人のようでもあり、本当に困つてね……。 （笑い）

それなら、私にはとてもだめですから、おことわりします。私はそんな器でないですからと言つてもいいのですよ。ところが、今まで祈つてきた伯母が言うには、エス様を畏れる方とお祈りをして、こういうお話になったのだから、主が力を与えて下さるならば、伝道者の半身となる事も不可能ではないのだから……。と、伯母の方が先に信仰を

持っているわけー だけど契めない。私自身がね、祈つて決めなさいと言つてくれるのです。その時は「一生懸命」主と私」で祈りました。

これ迄主の御旨だったから従いますと祈つてきたでしょう。祈つてきたのに色々な心配のために、あれも心配です、エス様これも心配ですと訴える様にして祈りました。

そうすると、生活の為には「まず神の国と神の義とを求めよ」の御言葉が与えられるし、また「義しき者の捨てられ、そのすえの糧こい歩くを見しことなし」

私はとても、私の信仰ではそこまで行けませんとエス様に申し上げると御言葉与えられるしね。どうしても言い逃れができないのです。最後には「義人は信仰によりて生くべし。もしりぞかば、わが魂これを喜びとせず」

結論は、この御言葉一つになったのです。詮じつめればね。

ですから、エス様有難うございます。神様が備えて下さつた道を私が拒んでいるとわが魂はこれを喜ばない。

「靈感譜」二四番

一、主よ、みむねにわれしたがわん

よしやみちはけわしくとも

………

二、われはおのがこのむみちを

えらみなさで主にしたがわん

………

先生・私の方の問題としては、こちらから話しをすることも

聞くこともできないし、それに、お前は献身者だから神と人との前に潔くなって、交際についても人の模範とならなければならぬ、という訳で、結婚式が済むまでもの言うてもいけないし、手紙出してもいけないと止められたんです。

それで困ったなあと思いました。普通のお嫁さんのように甘い夢をみてこられてもー私は命をかけて行くのだからーこんなはずではなかったと泣かれて、足引っぱられても困るからと思つてね。ある時、意を決して「おきてに叛くことなれど」（笑い）折滝先生には黙つて福岡まで行ったんですよ。

そして、家内の母に会つて、実は私はこういう気持で、これから先は聖書に従つて神様だけに信頼していく。だから

らこの世的に幸福にしてあげることがおそらく不可能だと思つたら、その辺のことを考えられたでしょうか？

母が言うには「榎本さん、その事については心配いりません。百合子も色々心配して、一生懸命祈つて決心がつかしましたので、もう心配ないと思います。」と云つて呉れましたので、ああそれでよかつたなあと思つて帰つてきたわけですよ。

奥様・主の御旨であるなら大丈夫、力も与えて下さるし、その中も通して下さる事もできる。これまで祈つて、主を畏れる人を主が与えて下さつたのなら、主には従うのが道ではないだろうか。そう思つて決心したわけです。

今から考えると、そんなに悲愴な決心をしなくてもよかつたと思ふんですけど……。（笑い）

先生・そういう決心をしたから、こういう生活をさせて下さるんだと思ふんです。

奥様・それでも、十年、二十年、三十年と子育て時代から戦争と、いろんな中を通りました。大変だなと思つた時でも、主がここにおいて下さっているのだ。又この困難の中を通して下さるといふ気持でね。その裏に流れているものがあ

って、迷うことがないんですね。

— それですから、あの時の決心は、私の一生涯を通して——
ああ神様はいい時に不安を与えて主のみ旨に従うことを教えて下さったのだなあと思います。不安なしで来たならばそういう時、それこそへこたれていたと思うんです。

— ギデオンが神様の御旨を知るために、何度も確めたように、同じ事をなさったわけですね。——

奥様・そうですね。

— 今のお話を伺いながら、リベカがイサクの所へ行く時のことを思い起したのですが、あの時のリベカもまだ見たこともない行き先もわからない、それでも私は行きますと言っています。多分同じ様に真剣に祈っただろうと思うんです。——

奥様・そうですね。私は八幡という所も見たことがありませんでした。

五、結 婚 式

— 結婚式は、いつされたのですか ——

先生・昭和十五年の十一月五日でした。福岡の教会でした。それで、いよいよ結婚するという事になって、私が郷里に

知らせたんですよ。そしたら両親が大へん喜んでね。そんなら父が結婚式に行くって言うて来たんですよ。

父は——今から考えると若いなあと思うのですけれど——その頃としては年だったんですよ。そんな年で長い汽車旅は疲れるから来なくていいからと言うたんですよ。そして母から、お前が来るなと言うもんだから、父が張り切っていたのががっかりしちゃって……と言つて来たもんだから、そんなら来て下さいって言うて手紙を出したら、一週間程して出て来て呉れたのです。

一週間程一緒に生活して、早天祈祷会にも祈祷会にもすべて集会に連れて行き、私の行く所へ引っ張って行つたんですよ。何とかしてこの際伝道したいと思つて、一生懸命連れて行つて。で、結婚式を二日後に控えた日に、折角来たのだからと阿蘇山へ連れて行つたんですけど、その時父が言うには、お前はいい生涯に入った。もう何をしてくれるより安心だと喜んでくれました。それで、それまで親の言うことを聞かない親不孝を許してくれたように感じましたんですよ。

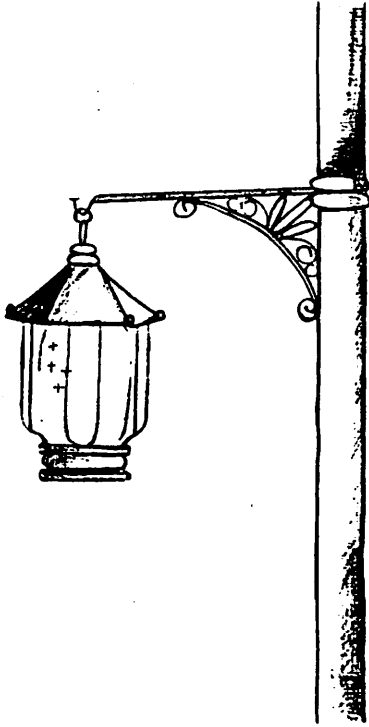
奥様・式が済むとその翌日からもう早天祈祷会でした。

先生・家内の方は、夜更かしの朝寝型なんです、それが早

天祈禱会！。

奥様……ちよつと辛かった。五時からお祈りしてね。そして六時まで行くわけよ。

(取材班一同時間の経つのも忘れて聞き入っていましたが、ふと気がつくとも夜も大分更けておりました。若いお嬢さん方もおられることでもあり、話はこれから新婚生活という非常に興味深いところでありますが、次回にお願いすることに、誠に残念ながら打ち切らせていただきます。何卒次号にご期待下さい。)



主の救いと旧牧師館の思い出

池田 みさお

私は六人兄妹の末子として生まれ、甘えん坊でした。又少々短気な所もあります。父は大酒飲、母は子供を育てるのに苦労しました。母なりに仏教の信仰をもって健康であるが故に耐えてこられたのでしょう。人様からお孫さんですかと言われた私ですので、あまり父親の愛情面には、さほど記憶はありません。終戦の年、知合いの方が親切に飲ませたメチルアルコールが災いして失明し、一年余りで亡くなりました。日頃の姿を見ていると、兄達は長兄を除いては、酒は飲みません。生真面目なサラリーマン。現在は定年を迎えました。

私が初めて教会を訪れたのは、昭和二十四年六月頃だったと思います。伝道集会の日でした。戦後のバラック建の時代でしたから、教会の建物がめずらしく、又ひっそりしていましたので、足をふみ入れる事もできず外に立っていました。「どうぞ」とおっしゃる方があり、中へ入りました。後でわかりましたが丸橋さんでした。うしろのベンチに腰かけておりました。牧師先生が講壇に立たれ、間もなくオルガンの奏

でる音に合わせ讚美歌の調べをうっとり聞いておりました。説教もわかりません。たゞ言えるのは、自分の気持が落ち着いた、安堵したことを今も覚えています。帰りに先生ご夫妻が一人一人に優しく声をかけて下さり、又いらつしやいとおっしゃって下さり、次週も待ち遠しくなってきました。

心の内に光のなかつた私には、喜びもなく、暗い表情だつたと思います。「重荷を負える者、我に來たれ。我汝らを休ません」(マタイ伝) イエス様を信じてお任せなさいと祈つて下さいました。集会が度重なる毎に不安がなくなりました。旧教師館を訪れ、家庭生活を見て教えられ、安らぎを得ては帰りました。

昭和二十六年、河内にて受洗致しました。神の子として新しくされたのです。二十七年帆柱の水害。上の家は下松さん、下が私の家で、川の縁でしたので流されてしまいました。

私はその頃映画館に勤めて切符を発売する係りでした。少しずつ心臓に雑音がして来ました。下松さんや水村姉妹の所でお世話になりました。

その後、教師館に住まわせていただきました。朝六時の早天祈祷会があつて、河本のおばあちゃんご夫妻、その他の方々がきちんと出席されてる姿に、たゞたゞ感心するばかりで

した。教師館も大変忙しく、経済的にも豊かな生活ではありませんのにこゝろよく迎えて下さいました。主を崇める日々を過す内に、だんだん内なる喜びが湧いてきました。神様を中心とした家庭はなんと和やかな雰囲気でしょう。食前の感謝に、子供さん達が手を合わせて「アーメン」と言っている姿に感動させられました。簡単な生活の中で、共に分ち与え、百合子先生は自分の事など忘れて、日夜労をなされていきました。部屋はいつも清潔でした。来客も多くて、先生は休む間もなく、集会に伝道にと毎日多忙な日々でした。

誠さんが病氣した時です。ご夫妻は徹夜で看病されていました。見ゆる状態がどんなに悪くても、唯主に祈つて、聖言を信じて感謝しておられた事が一番印象に残っております。自分だったらどうだろうか。病氣ばかりとは限りません。一歩間違えば、躓いてしまう者です。神様は生きておられると教えられました。その後、誠さんはいやされ元氣になられました。

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあづかるわたし達には神の力である」(コリント第一)。

時は流れ、私は三番目の兄が結婚するまで暫らく手伝に行っていました。百合子先生の紹介で、柴原先生の洋服店へ通

うようになりました。兄の結婚も成立致しましたので、姉の所へと思っていました。又牧師館でお世話になる事になりました。洋裁店にも通わせていただきました。見習の時ですから、ひたすら忍耐が必要でした。やっと人様のワンピースが縫えるようになり、仕上りの製品にアイロンを掛けていました。一寸したはずみに大きな形を残し、焦してしまいました。「あゝ」ショックでした。牧師館に帰り、先ず先生に報告です。先生はたゞ笑って「一度失敗したら後ははしくなるよ。」とおっしゃいます。その夜の集会での説教の中に、次のみことばがありました。

「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを知っているからである。希望は失望に終ることはない。」(ローマ書五章)

この聖言葉に励まされました。私は洋裁よりも精神との戦いであり、自立する訓練の場でもあったと思えます。(現在は自分で言う程自立はできていませんけど。)

さて、牧師館では子供さん達の身長は、遙かに私を超え、高校、中学、小学生と成人しておりました。献身者の東さんもおられました。大家族です。先生ご夫妻も毎日大変です。私も主の臨在に近づけていただき幸福です。失敗も多く、何

もできなかった私に、百合子先生は良く指導して下さい、毎日が楽しく平安でした。三年間の思い出は、何時も私の胸に納めて大切にしております。神様の恵にあつまり、先生ご夫妻、子供さん達のご愛に心から感謝致しております。



主は今も支え給う

池田 みさお

私は十七、八才の頃、自分では気がつきませんでしたでしたが、健康診断で心臓弁膜症といわれていました。日常生活には差支えありませんでしたが、風邪で床についてしまいました。いつもの事だからと甘くみていましたが、尿が出なくなり、心臓、お腹が圧迫され、休む事もできず苦しんでおりました。榎本先生が訪ねて下さり、祈って頂いて後の首から背中へとさすって頂き、少しは楽になりました。二、三日意識も朦朧として生死をさまよったようです。

八木田先生の紹介で、現在萩原中央病院の縄田先生が来られて診断され、入院をすゝめられました。自分の力ではどうする事もできずイエス様に祈っておりました。せめて姪が成人するまでとの思いでしたが、黒崎の年金病院へ入院しました。朝夕の注射、新カテ、色々と検査の毎日でした。どの病室も沈んだ患者の姿に同情するのみでした。それに引きかえ私は何と心強い事でしょう。イエス様が十字架にかゝられ、一切の罪を負い、私達を贖って下さり、よみがえり、今も生きて、私達の為にとりなして下さり守って下さる。イエス様

を信じて良かったとつくづく思いました。

「手術ができますよ」と言われて途惑いました。兄姉にこれ以上負担をかけてはと、気持が重くなるのでした。祈って主に信頼していればいゝものを、愚かな私は現実にとらわれ涙の方が先に出了ました。

思い煩わなくても良かったのです。手術ができる様道が開かれました。感謝して、その夜はぐっすり安眠ができました。「永遠のみ手の下にて汝らを支えん」力強い聖言です。不思議と手術に対しては恐れはありませんでした。榎本先生、教会の皆様方の祈りの内に、昭和三十八年四月手術は無事終了しました。

ベットの上での四、五日は身動きできなかつた時の苦しさ、痛み、一時的な苦しみなんかほんの一部に過ぎないと思いましたが。いよいよ外科病棟へ帰れます。感謝と共に嬉しかったですね。部長先生から「心臓の血管が細くて血液が逆流してたので新しい血管をつなぎました。」との説明でした。

日増しに元気になってきましたが、今度は頭が痛くなって気も転倒しそうです。少し心配もありましたせいか、ノイロ―ゼにかゝつたようです。不眠も続き祈っても気持も落ち着きません。「退院してみては。」と言われ、早速退院してしま

いました。家でも頭の痛みは変わらず、耳鳴りがします。母にも心配かけました。病院へ行きますと「幻聴だ。」と言われて随分悩まされました。足は自然に牧師館へと向い、先生に祈って頂き休ませて頂きました。それですっかりいやされました。どんな状態の中を通るとも、主は共におられて支えて下さると信じております。

二年程過ぎてから結婚の話があり、男の子が居る家庭でした。私も体の弱い上に何の取得もない者でしたが承知して下さり、又母親になる自信などありませんでしたが、自分できるだけのことをなせばと決心しました。

主人は結婚したら酒はやめると固く言っておりましたが、空吹く風の如く、晩酌を始めました。濃厚な人でしたが酒好きですから、毎日働いているのだからと、私も強くは言えませんでした。二人共肝臓の悪い事をさほど認識していませんでした。主人はその後糖尿病にかかり、食事制限、薬を飲み飲み働いておりましたが、肝硬変になっており製鉄病院に入院しました時は死が近づいていました。黄疸が出て吐血を始めました。どす黒い血液の固まりが後から後から……。そつと口をふきながらも涙が出てきます。朝夕スプーン一杯のおかゆで命を保っておりましたが主人も悟ったのでしょうか、

自分はガンの様だからと、息子に、私の事まで姉に頼んで昏睡状態に入ってしまった。静かに寝息を立て、一週間後に安らかに亡くなりました。(解剖の結果は肝ガンでした。)

入院生活半年間、少しでも主人の看病ができたこと、暫らく教会を離れておりましたが、神様に感謝し、魂の為に祈りました。先生、みな様方のお祈りに感謝致しております。

三ヶ森の姉の家に帰り生活する様になりました。間もなく母が胃ガンと診断されました。医者は「本人の好きな様にさせてあげなさい。」と言われ泣きたくなりました。あまり床にもつかず苦しみもせず、約一年後に亡くなりました。主人よりも、元気な母よりも私が先に死を覚悟しておりましたが人の生命は神様のみ手の内にあるのだと教えられました。

気晴らしに働いてみようと思ひ、クリーニング店にパートで勤めました。結構楽しいのですが風邪から肺炎にかかり入院となりました。よくもこゝまで生きられたのですから何も思ひ残すこともないわ。最後になるかも知れない一つメモンの食べ納めとして中間の市立病院へ入院しました。三、四週間ぐらいでよくなり、心臓で入院したのではないからと退院させられました。半年間働いたお金はすっかり入院費と消えてしまいました。「空の空いっさいは空である」(伝道の

書) タマゴ売りもだめになりました。

最初に手術を受けてから十二年目に二度目の心臓手術を受けられるとは夢にも思っていないませんでした。心肥大、心不全、三せん弁が塞がりつゝなっていたそうです。市から身体障害者手帳を頂き手術費用も援助され、術後の事も何の心配もなく配慮されていました。新鮮血が必要となり、伊規須先生、高木さん達の働きにより整えられました。昭和五十年十二月榎本先生、教会員の皆様方の祈りの内に手術が行なわれました。術後、麻酔から覚めておれば、苦しみは避けられなかったでしょうが心配をよそに二、三日昏々と眠っていました。そうして、一瞬に目を覚ました時、私は「あら」と周辺を見回したものです。両側に死んだ様に横たわる患者さん達、仕事をしてた看護婦さんが「目が覚めたね」と声をかけます。私は手術が無事に終わったのだとわかりました。以前より呼吸も楽になり、現在は家路につく坂道も、食事、家事手伝もできる様になりました。

「たといわたしは死の蔭の谷を歩むともわざわざいを恐れませんが。あなたがわたしと共におられるからです。」

私の大好きな詩篇二十三の聖言の如く、私は主によって生かされ、主の憐れみにより信仰を保つことができます。又姪

も神を信じて受洗し、共に主を崇めて讚美します。姉は新日鉄動続三十五年の定年を迎えました。

榎本先生ご夫妻、皆様方の蔭の祈りの力であります事に深く感謝してお礼を申し上げます。



「父と子の祈り」

古野 とみ子

わが子よ、主の懲しめを軽んじてはならない。
その戒めをきらってはならない。

主は愛する者を戒められるからである。

あたかも、父がその愛する子を戒めるように。

(箴言三〇十一—十二)

父さん、天国でなにをしているかな？

おいしいとうふを作っているかな？

(ねてもさめても仕事一筋だったから。)

主の祈りをつぶやいているかな？

さんびか、うたっているかな？

(おたまじゃくしが苦手だったからちがうかも。)

父さん、書いてくれたのね。

(半身不随なのに…… 力強く)

「福音教主」

父さん、約束守れなくてごめんね。

聖書が重たいと言ってたから

ショッピングカーを買ってあげると言いながら……。

父さん、お祈りありがとう。

いつも、思い出して、感謝して、

愛歌をうたわせていたどいています。

おもいすぎるも はずかしや

父のみもとを はなれきて

あとなきゆめの あとを追い

むなしき幸を たのしみぬ

(さんびか二四五)



玄海の孤島で

津留崎 浩 行

されば我が愛する者よ、なんじら常に従いしごとく、我がおる時のみならず、我がおらぬ今もますます従い、畏れおののきて己が救いを全うせよ。神はみこころをなさんために汝らのうちにはたらき、汝等をして志望をたて、業を行わしめ給えばなり。

(ピリピニ・二二一―一三)

小呂島に赴任を命じられたとき、いささか当惑いたしました。

というのは、小呂島は、陸から四十五キロの玄海灘の孤島で、定期船もなく、毎週の礼拝などとても望めそうもなくなつたからです。

さっそく榎本先生に相談いたしましたところ、独立戦争中、野営のテントの中で毎週礼拝を守つたワシントンの例をお話しいたゞき、開かれた道を信じ、あとは主にお任せして赴任いたしました。

赴任してみると、やはりいろいろな試練が待ち受けていました。

それはもう、自分ではどうにも解決できそうもない、困難な問題ばかりでした。毎晩、うす暗い校舎の廊下を、テニスコート程の狭い運動場を、時にははだして踏みしめながら、ヨシユア記一・三の聖言を握りしめ、主に訴え続けました。

― 凡そ汝らが足のうらにて踏む所は我これごとごとく汝らに与う。我がさきにモーセに語りし如し ―

やがて主は、つぎつぎに思いがけぬことを起こして、祈りに答えはじめられました。

しかし、何にもまして感謝のできた事は、翌年赴任された岩田校長先生が入信されたことでした。昭和五十一年九月はじめのことでした。校長先生は、大決心のもとに、サタンの厳しい妨げを退け、進んで榎本先生の導きをお受けになり、入信なさいました。

それ以来、毎朝毎夕、奥様ともども、三人で家拜に励みました。漁り火の輝く夏の夜も、波しぶきの吹きつける冬の朝も、主の手に守られて、続けさせていたゞきました。

これは大変すばらしいことでした。ミッションスクールならばとにかく、一般の学校で、校長と教頭が朝夕心を合わせて祈るなどということは、主の手の働きなしでは考えられません。この事の為に、一年先につかわされていたことをよう

やく覚り、主の摂理の不思議さに感激いたしました。困難な
でき事のために、校長室で心を合わせて祈ったこと、約束に
忠実な主のお働きに感謝し合った事など、楽しい思い出を忘
れることができません。

夜自室にもどっては、榎本先生の録音テープを聞き、バク
ストン師の使徒行伝講義で聖書を引照しながら、恵みに満た
される毎日でした。入信以来三十年の歳月を重ねましたが、
小呂島での毎日は、私の信仰生涯に格別に意義深い恵まれた
三年でした。その間に証しされた主の約束の確かさが、今私
の信仰の大きな支えとなっていることを思うとき、人間の常
識を超える、主のご計画の計り知れぬ深さに、心のひき縮ま
る思いのこの頃です。

「苦しみに会いたりしは」

石 田 秀 子

私が前田教会に導かれ行く様になったのは計り知ることの
できない神様の深い哀れみを、神様の摂理で頂いたのだと、
今、心から感謝しております。

折尾女子商業を卒業して以来二十年間、一度も教会に行っ
た事もなく、又思い出もしなかったこの私が、今になっ
てなぜ？

忘れもしません五十四年六月二十四日、木曜会に一人では
とても行く勇氣がなく、植木さんにご一緒して頂いた事が昨
日の様に思い出されます。私は何か強い力によって、自分の
意志ではなく、操り人形のように理屈ではなく、どうしても教
会に行きたい、いや行かなくてはいけない……。本当になぜ
こんな気持が突然おこったのでしょうか。

思えば思う程不思議というほか言葉がありません。

私は商売家の四人兄妹の末っ子として生まれました。中学
一年生の時に、母が、その日の夕方まで本当に元気で親類の
所に出かけて行ったのに、その帰る道で心臓発作がおこり、
私達がかけたつた時には、その肉体はまだ暖かく、本当に死



んでしまったとはどうしても思えないほどの呆気無い死でした。親が死ぬなんて考えてみた事もなかったのに……。それ以来家庭の中は忙しさもあってとげとげしく、愛のない砂漠の様な毎日の生活でした。

私は三十三才の年まで家の手伝などして、一度も外に勤めに出る事ありませんでした。五十年に人に勧められ結婚をしました。この結婚によって私の人生は一変してしまいました。年でもあり、結婚についての焦りもあり、家族からも早く開放されたい気持ちもあり、又愛に飢えていた私は、その人の見せかけの優しさを見抜く事ができませんでした。本当に自分の愚かさ、軽率さが招いた事で、どんなに悔んでも後に戻る事のできない取返しのない事でした。

どうにかしてその人の良い所を見つけて行って行こうと思うのですが、働くことの嫌いな賭事ばかりする人で、一生を共にする事ができないと決心をしました。人に笑われたくない、結婚して一年も続かなかつたと言われたくない。本当に馬鹿なことですが、私にも意地があり、本当は楽しい筈の新婚生活も私にとっては地獄でした。あの時は薬をのまなくて寝ることができない毎日でした。いっそひと思いに死んでしまいたい。その事ばかり考えて過ごしました。

死ぬことができなかつたのは勇気がなかつたことと、私には父がまだいると思つたからです。その年の十二月に離婚を決意し父に相談に行つたのですが、その時の父は病気で体も気力も弱くなつていて、自分はどうしてやる事もできない。

この家にお前を迎える事はできない。兄達が、私が帰って来る様な事になれば自分達がこの家を出て行くと言つていて、自分の気の済む様にするようにと言われ、私はその時、これが親だろるか、兄だろるか、私は今死ぬ程苦しんでいるのに、今助けてほしいのにと恨みましたが、でも、今あの時を思う時、心から本当にあれでよかつたのだと思います。あの時私が家に帰っていたら、神様の救いに預かることなく、本当に惨めな生活を送っているのではないかと思ひます。半年がかりで離婚が成立し、父がその時涙を流し、心から喜んでくれました。私は自分の親不孝をその時程本当にすまないと思つたことはありません。もう決してこの父を悲しませてはいけません。自分一人ですら生きていこう、父に安心してもらおうと思ひ、それこそ必死でした。生活をするにはどうしたらよいかもわからず、とにかく仕事を探し勤め始め、どうにか生活を建て直し、自分の精神状態も安定しかつた矢先の五十一年十二月父の突然の死でした。父に安心し

てもらいたい一心でがんばってこられたのに、心の中にうめようもない大きな穴があいてしまい、生きていることがこんなにつらいものか……。あの時を振り返る時、今こうして生きていくことが何か不思議な気がします。

何かにくさげらなくは生きて行けない弱い私は色々な宗教に救を求めましたが平安などあるう筈もなく、かえって不安が増すばかりでした。それに精神状態も不安定で心は荒れずさび、仕事も一つ所に落ち着かず点々と変え、もうどうにもなれという様な自棄っぱちな気持で生活しているのですから良いことがあるう筈ありません。新しく勤めた所で左足を骨折しギブスをはめられ一ヶ月間動く事もできず、自分はどうしてこんなに運が悪いのだろうか、こんな人生なら太く短かく面白おかしく生きてゆこうと思い、中原さんにもその様な事を言いもし心配かけました。でも神様は本当に不思議な事をなさいます。墮落の一步手前で間髪を入れずに救いの手を差し伸べて下さいました。

「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。

わたしは、あなたの名を呼んだ。

あなたはわたしのものだ”

(イザヤ四三・一)

このみ言葉を先生を通して語られた時、雷に打たれたように体が感動で震え、涙がとめどなく流れ、神様有難うございます。こんな自分勝手ばかりしてきた醜い汚い私を、私のものだと言って下さる。あゝ有難うございます。有難うございます。どんなに感謝してもし切れるものではありませんでした。私の様な者の為、罪のないイエス様を十字架につけてもいとわれないほどにこの私を愛して下さいました。十字架の血潮の賤い故に、罪を許したからさあ帰っておいでと焼ける様な思いでいつも呼びかけて下さっていたのか。思えばあの時もこの時も自分にはわからなかつたけれども見えざる手をもって守り、救いに導き入れようとなされて、さまざまなか中を通して下さったのです。又高校の時は出席の印だけでもらいに行っていた様な私を「ひとたびわれに來たるもの、我これを捨てず」と真実のみ言葉をもって救って下さったのです。その上神様の子供として下さり天に名が記された、尊い身分を与えて下さったのです。本当に神のみ名はほむべきかな。ハレルヤです。

五十五年四月七日、バプテスマを五人の兄弟姉妹方と受けさせて頂きました。その時の景色の美しかったこと。まあなんと美しい所に私は今まで住んでいたのか。空、草、木、桜、

鳥のさえずり、初めて目、耳にした様な深い感激でした。

“だれでもキリストにあるならば、その人は新しく作られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである”

(コリント(2)五・一七)

今、私は新しくせられたのです。これからは神様にどんな事があっても信じ従って行こう。嬉しくて嬉しくて夢の中のでき事の様でした。

神様の大きな恵みとご愛の中で、

“苦しみにあつたことはわたしには良い事です。これによつて、わたしはあなたのおきてを学ぶことができました。” (詩一一九・七一)

このみ言葉を心に抱いて本当に心から感謝しています。両親の死、継母との葛藤、離婚……色々な道を通つて来ましたが、そこを通つたればこそ今のこの喜びがいっそう大きく、又何一つむだな事をなさない全てを善に変えて下さる神様に感謝を捧げることができるのです。

“今うまれたばかりの乳のみ子のように、まじりけのない霊の乳を慕い求めなさい”

(ペテロ(1)二・二)

本当に心から慕い求めて行きたいと願います。又、もっともつとイエス様を知りたい。神様に近づけて頂きたいと思つています。み言葉に従つて歩いて行きたいと思つても、歩むということがどうしたら歩めるのかわからないでおりますが、今にきつと神様が、

“わたしはあなたを教え、あなたの行くべき道を示し、私の目をあなたにとめて、さすであらう”

(詩三二・八)

との約束です。心の目を開いて、歩める様に力を与えられ、又導いて下さることを信じて待ち望んでおります。

私のような無きに等しい小さな者にも、こんなに限りない愛をそそぎ、豊かに恵み給う万軍の神が、常に共にいて守りさへえて下さいます。又、避け所としてより頼むことのできる私達はなんと幸いなことでしょう。

神様の恵みを味わいつつ、毎日を感謝のうちに過ごさせていたゞいております。

イエス様ありがとうございます。

アーメン

うへ
宜われよき嗣業を得たるかな

高 木 ツルエ

私は、昭和二十六年三月二十五日、イエス様を神の子救主と信じて、新しい生涯に入らしていただきました。

キリスト教には全く無関係な私でしたが、職場の上司であるクリスチャンのご夫婦と親しく接しているうちに、キリスト教についていろいろと導かれました。

天地万物を創造し、今なお支配しておられる真の神様がおられること。私たち人間も、神様のかたちにかたどって万物の霊長として、清く尊く造られた者であることを教えていただきました。

また、今まで神として拜んできたものは、実は人間が造ったもので、私たちを本当に助けることも、救うこともできない偶像であることなど教えられました。

キリスト教は愛の宗教であり、清い宗教であると知るにつれて、私はだんだんとキリスト教へ関心を持つようになりました。

それは、人の前ではまじめな娘として、認められていましたが、その内面では、他人の幸をねたんだり、憎んだりの日

々でしたので、心に喜びも満足もなく、そんな自分を見つめては、そのみにくさに人知れずうなだれていたからです。

そんなある日、私は決心してキリスト教の集会に出席しました。そこは、大分県玖珠郡東飯田村^{はんた}恵良（現九重町）にある東飯田伝道所で、私の実家のすぐ近くにありました。

この伝道所は、私の結婚の仲人をして下さった太田ご夫妻が、恵みに感じて自宅を献げ伝道所として用いられている所でした。専任の牧師はいなくて、由布院教会の秋山先生が兼牧されていました。

集会に通いはじめた頃は、私の心の中のすべてをお見通しの神様の前に出るのが何だかこわくて深入りしたくない思いました。

ところが、集会に出席していた時、ご聖霊が働いて神様のご愛を示し、恐れを取り除いて下さいました。そして、イエス様こそ私の罪をあがなって下さった救主であることを信じさせていただき、その年の復活祭の日^{イースター}に喜びをもって受洗いたしました。

昭和二十七年の暮、導かれて結婚いたしました。八幡前田教会に転籍し、各集会に出席させていたゞくことになりました。

昭和三十三年一月六日の伝道集會に出席した時のことでした。その日の御説教は、ルカによる福音書二十三章でした。先生のお話を通して、ご聖靈に迫られ、「罪とは何か」、「罪人とは誰のことか」を深くさぐられました。殺人犯として当然十字架にかけられるべきバラバこそ、実は私の姿であることを示され、「罪人なる私をあわれんで下さい」と神様のみ前にひれ伏しました。

このような私の罪のために、罪もたがもない神の子イエスが、私に代って十字架にかけられ死んで下さったということ。その流された御血潮のゆえに、私の罪は全く許されたことなど、全身全霊で受けとめ信じさせていただきました。お話が終り讚美歌二四九番を涙とともに心から讚美しました。

われつみびとの かしらなれども

主はわがために 生命をすてて

つきぬいのちを あたえたまえり

集會後、先生にこのことを告白しお祈りしていただきました。この日から、本当の意味でのクリスチャンとしての私の歩みが始まりました。

救いにあづかってから三十年、ふり返ってみますと様々な

ことがありましたが、その中で十字架を仰いで信頼してゆくとき、主は豊かに慰めを与え、希望と生きる力をお与え下さいました。

いまは、主にあつて変らない平安と確信を与えられ、感謝のうちに神様にお従いさせていただいています。

「まことにわたしは良い嗣業を得た」



詩

「神様 ありがとう」

野 口 米 子

闇の子でした 悩みの子でした
ひとりぼっちでした。

ほんとうに暗い鉄格子の中で寝ました
ふとんのすぐそばにあるトイレの横を

大きなねずみが走りました
おそろしゅうございました

頭に、ジュンと電流を通されました。

ひとりぼっちでした

くよ、くよ、思い煩いました

長かった 暗い 暗い 暗い 日

イエス様と 天を見上げました

胸の奥にともった小さな灯が

だんだん 大きくなって

体全体が、燃えます

イエス様は、すばらしいお方

やっ と わかりました

心が落ちつき 喜びでいっぱいです

でもあの方は、神様を知らない

あの方を救って下さいと

何度祈ったことか 私と同じように

あの方の心をいつも

喜びで満たして下さいと

何度祈ったことか。

あの方にして欲しいことは、なにもない

ただ イエス様を信じて

私の欲しいものは それだけ

私は 朝に 夕に 祈ります

天の命の書に

同じ白い ページの上に

私とあの方の名前が

そろって書かれますことを

.....。

詩 「すべての事に感謝して」

野 口 米 子

もったいない お便りに 感謝

大濠の週報に 感謝

お祈りする事だけしか……とありました

いえ、いえ

先生の存在自体が、私への

大きな 贈り物です

今朝も一番の お祈りの後

先生のお声と お証詞 聞きました

真直ぐに空にむかって伸びる竹の姿が

お好きな先生

あのダビデが お好きな先生

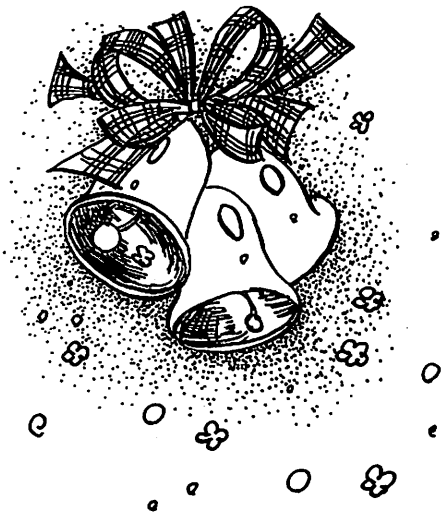
“すべて主を愛する者は主が守られる”

(詩 一四五・二〇)

覚えの悪い私 何年か前に先生から

戴いた 日めくり

可憐なコスモスの花と一緒に



この聖言が あります

そして 昨年暮に戴いた

美しいキャンドルのしおり

どの贈物よりずっと素敵

贈物

詩

「追憶」

野口米子

ザア、ジャー、ザア
今朝も床の中で聞く、編機の音
ゆうべのだんらんの、ぬくもりの残る
じゅうたんの居間をへだてた
小さな部屋から 聞えてくる
白い砂浜に打ち寄せる波の音のように
快く 流れてくる。

あゝ今日も元気だと ホッと
七時間の暗闇の中 彼女に
たっぷり 眠りが与えられたらしい
外は未だ薄暗く あたりは寒い
ふと音が止む カチャン コンと
石油ストーヴに 火をつける音
それから玄関の扉を あける音

もうすぐ熱いミルクと 朝刊を持って

枕元に そっと 置くだろう
ただ 待つ 床の中で
今日の仕事のことを 少し思う
そして彼女が居なかった
幾度かと 想う
帰って来る度に 丸丸太り
必ずレース編みの土産を 山の様に
どっさり持って帰った 彼女
……………

あれから十年 ……………
彼女は変わった 確かに強くなった
自分もやっと少しの安らぎに似たものを感じる
それは 彼女が 大きな目に見えないものを
しっかりと
手にしたせいだろうか
いや わからない
わからない

詩

「どっこいしょ」

野口米子

どっこいしょ、どっこいしょ

生れて初めて覚えた 加代の言葉

どっこいしょ

はじめての誕生日を、天草ばあちゃんの

背の中で迎えた 赤ちゃん加代

どっこいしょ

おばあちゃんの口癖を

いつの間にか覚えた

どっこいしょ

「ぬるいめにね」これ

神津カンナさんのはじめての言葉

加代の飲んだミルク

熱かったか ぬるかったか

知らない 母親

加代の人生、 第一歩から 荒野だったかも

知らない

喜怒哀楽の 激しい子

スエーデン刺しゅうの袋を

H先生の誕生祝いの為に徹夜までして作った

根気の良い 頑張りやさん

明るい性格だけど 出たり入ったりの

欠点だらけの子

だけど 私は喜ぶ

加代が、誰よりも イエス様を

慕っているから

” ユダヤ人の王としてお生れになった方は、

どこにおられますか ”

(マタイ二・二)

加代がはじめて覚えた聖言葉

現在 二十才 明日成人式

でも神様の前には 乳飲み子と同じ

大きな鼻ばかり目立った生れたての

赤ん坊と同じ

エキゾチックで可愛い と言われた

幼児の頃と同じ

言っているでしょう

あの子供さん ありがとう

今はもう 海を隔てて

別々の所になったけど

他人ごとと 言われそうだけど

今は 幸せ

住んでいる所が 庭付きの平家になったからでは

ありません

それは、神様の子供に なったから

みどりと 青い空が いつも近くにあるからでも

ありません

それは、あの頃と 私の中身が変わったから

関係ないと言われそうだけど

私のすべてをおまかせできる方に

めぐり逢えたんですもの

それは 偉大なる方

この宇宙を すべてお造りになったお方

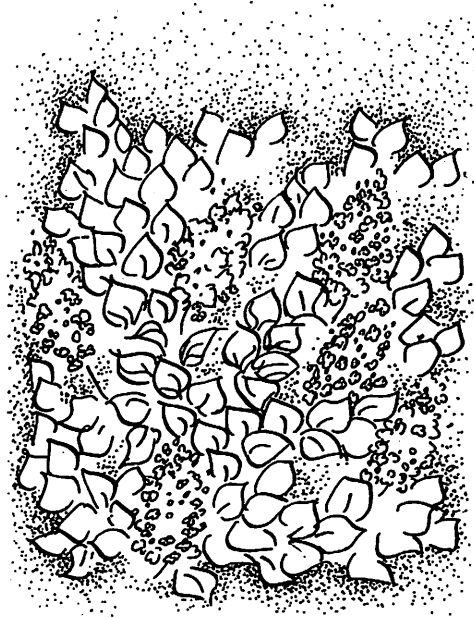
それは 神様

もう 私のことなど お忘れでしょうけど

階段の人 ありがとう

私は もう大丈夫

神様と一緒にだから。



「さ ん び」

伊 規 須 太 郎

「主は、わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない、と言われた」

人は人を「見込みがない」と冷たく突き放す。神様の前に私はどれほど捨てられても仕方がないのに、「決して離れぬ、捨てぬ」とは何と有難いお言葉だろうか。主は命を献げてこの事を証（あかし）して下さった。そして身近な出来事を通して確かな体験をさせて下さった。「主はわたしの助け主です」と今は憚る事はありません。私を誇るのではなく、主を誇るのですから。

讃一六二「命を献げし証人よ、ダビデの御裔（みすえ）を主とあがめよ……」

☆ ☆ ☆

「あなたはどこにいるのか」と神様から問われる。生きている事は当然ではない。影も形もない塵に過ぎなかつた私が、尚ほるびないのは主の仁愛によりその憐憫の尽きざるによると悟れば、欠乏を嘆くより、生かされる感謝で溢れる。主が

私の嗣業とは！ 「おのれを待望む者………に恵みふかい」
とのお約束は単純明快に私の中に成就した。深い平安に浸りながら、周囲が一変しているのを見て、神様の奇しき救を感じる。

讃五〇二「あるに甲斐なき我をも召し、あまつ世嗣となし給えば、誰か洩るべき主の救に」

☆ ☆ ☆

「望み得ないのに、なおも望みつゝ信じた」とのアブラハムの態度は、私の為に記された信仰の秘訣だ。今、信仰が持てなくても、何とかしてとジリッジリッとにじり寄る。遂に「信仰なき我を助け給え」と飛込むと、死人を生かし無から有を呼出される神は、すぐそこに居られた。

讃二七〇「信仰こそ旅路を導く杖、弱きを強める力……」

☆ ☆ ☆

「……主が今日あなたをたの為になされる救を見なさい………主があなたがたの為に戦われるから、あなたがたは黙していなさい」目の前の事ばかり大きく見えて思い悩む時、ハッと目を上げると、主が今立って居られる。そのお声の何と

真剣な事か、私の耳は何とぼんやりしていた事か。「紅海を二つに分けられた者に感謝せよ、そのいつくしみは永遠に（勿論現在も）絶える事がない。」もうつべこべと申し上げる事はない。日々に我らの荷を負われる主はほむべきかな。

讃二六七「神はわがやぐら、わが強き盾、苦しめる時の近き助……」

☆ ☆ ☆

「……あなたを造られた主は今こう言われる、恐れるな、私はあなたをあがなった……」短い文章の中に「わたし」

「あなた」と何度繰返されている事か。造り主が選んだと言われるのに私が何を言えよう。左右を見まい、神様は私を呼んで居られるのだから。「私は自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者を、いつくしむ」とある。この私が何者なのでこれをみ心にとめられたのでしょうか。ああ主はほむべきかな。

讃二四九「思えばかかる罪人われを、探し求めて救い給いし、主のみ恵みは限りなきかな」

☆ ☆ ☆

「地を造り……形造つて堅く立たせ……その名は主……」

威厳に満ちた神様のお名乗りノ 私は神様をこんなにはつきり信じていただろうか。冷たく閉じこもっている私に対して神様の方から心を開いて下さったのだ。溶かされて心を開くと、私の義を助け守って下さる事がわかった。欠け多い者に目をとめ、上から主の義を着せ天の礼拜に加えて下さる。この活ける神様に対し私もはっきりお答えしよう。

讃五〇六「妙なる愛かな天なる御神は、御子をも惜しまで降り給えり」

☆ ☆ ☆

盛大な結婚式を見て陰の準備を思う。確かに見えるものは現れているものから出て来たのではない。神様は「私達が神の子と呼ばれる為には、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい」と言われる。人が人に言うのではない、宇宙の創造者が、この私を子供として下さった!! ただ驚き感謝する。力は神にあり憐れみもまた神のものです。讃五〇六「父なるみ神と、み子なるイエスとのみ恵み、はかり知られず……」

☆ ☆ ☆

「足から靴を脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」エジプトを追われた失意のモーセが新しい使命に遣わされる事となった転機。これは私のかのみだ。人間の思いで物を見るから不平不満が出て来る。しかし靴を脱いで永遠より永遠に生き給う神様を仰ぐ時、私の立っている所が聖地となった。ある盲の友人は言う、「折角盲人になつたのだから、神様から与えられた使命を果たしたい」と。「私の生涯のすべて——事情も境遇も、人間関係も——は、私の為に使われたものであり、恵みによる聖き地である」と知って感謝する。

讚五三三「奇しき主の光こころに満つ、み空わたる日のかげにまさる」

☆ ☆ ☆

「……しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでもかわくことがない……」異邦の汚れた女に対して、イエス様の方から声を掛けられたのは大変な事だ。「そむける民に私はひねもす手を伸べて招いた」とあるように、イエス様は何とご謙遜な方だろう。私はこの婦人以上に汚れた者であつ

たのに、こんな者に声をかけ招いて下さっただけでなく、

「私の血は眞の飲物」とご自分を私の為に注いで下さった。そして今も思いやりを以て包み、私の為に信仰を持って下さる！この方を喜び、この方に喜ばれる礼拝を献げたい。

讚五〇六「妙なる愛かな、あめなるみ神は！」

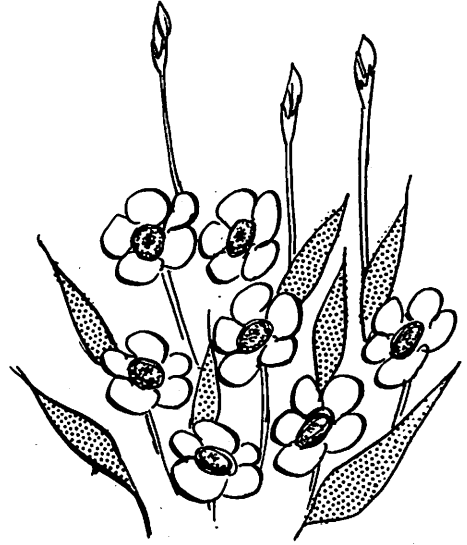
☆ ☆ ☆

「私は再びこれを聞いた、力は神に屈することを。主よ、いつくしみもまたあなたに屈することを」この主が信頼する者に必ず報いて下さるのだから、隠れた所で祈る事は、何と尊く大きな御用であろうか。「四方の風を止める四人のみ使」と、黙示録にあった、自らは溶け出してタンクを保護する陽極棒を思う。憐れみ深い神様は、不信仰な私に繰返しこの奥義を刻んで下さった。力とはすべての力です。出来ない事のない神様の力です、よくわかりました。

讚九「力の主をほめたたえまつれ……救の主を……命の主を……栄の主をほめたたえまつれ」

☆ ☆ ☆

「……あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、



だれにひとしいというのか」激しく沸る神様のみ思いが迫って、私の冷やかな心が目覚めさせられた。対象のはっきりしない信仰など、何と愚かなものだろう。しかし、上から来るものは、すべてのものの上にある。高く高く目を上げるとき望は動かない。私の目は、何と低い所へ移り易いことであるか。

讃七七「山なす荒波、逆巻きつつ、巖も裂けよと、寄せ来ば来よ、み神はみ腕を高く挙げて、忽ち浜辺に繋ぎ給わん」

☆ ☆ ☆

「……神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてさげなさい……」私が従うのではなく、あわれみで従わせて頂くのに、神様に対して心を閉じる事は何と筋違い、神様にとって何とご迷惑な事だろうか。次々にお言葉を思い起す、「どうかあなたがたの方でも心を広くして、わたしに應じてほしい」「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える」「まず神の国と神の義とを求めなさい」「事ごとに……あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」「神に近づきなさい。そうすれば神はあなたがたに近づいて下さるであろう」等々。わかりました、神様は私のすべてを知り尽くして居られるのだから、私も心を開いて飛び込みます。私の口の言葉、心の思いがあなたの前に喜ばれますように。

讃二四〇「閉ざせる門を、主は叩きて、答いかにと、たたずみたもう……」

☆ ☆ ☆

「かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう」十字架の上で「すべては終った」と語られ、救を

遂げ給うた方、涙を全く拭い取って下さる方を仰ぐ。その命の泉は何と深く、その水は何と無尽蔵な事であろうか。宇宙には天体を飲み込むブラック・ホールがあると云うが、逆にこの輝く恵みの泉は、渇き求める者にすべてを注ぎ出して下さる、神の子の身分も、天国の資産も !!

讃二一七「あまつましみず、飲むままに、渇きを知らぬ身となりぬ。尽きぬ恵は心の中に、泉となりて湧き溢る」

☆ ☆ ☆

「ふたりの者かもし約束しなかつたら、一緒に歩くだろうか」世のはじめの先から、この小さい者に目をとめ、選び給うて、あくまでも愛の干渉をして下さる方！再び隠れ給わぬ師ノ 神様と共に歩む秘訣は「約束」にあった。信仰による義を賜う神様からの約束、明らかな保証の十字架を仰ぐ時、私は何も申し上げる事はありません。冒頭のお言葉を叱責のように聞いた事もあったが、今は恵の言、愛の言とわかりました。神様と共に歩かせて下さるから感謝します。

讃三一二「いつくしみ深き友なるイエスは、変らぬ愛もて導き給う、世の友われらを棄て去る時も、祈りに答えて労り給わん」

☆ ☆ ☆

「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない」じつとみ言葉を見つめ、味わう。ダニエルの夢の中で大石が全地に満ちたように、「主」という一字が何と大きく強く私を占領してしまつた事かノ 思いやりの大祭司、全く救う大祭司が、私の牧者となつて下さつた。羊は牧者を選べないが、主はまず私を愛し、私の為に命を捨てて下さつた。

キリストの中にすべての宝が隠されています。この詩篇の鍵は、冒頭の主でした。七つの封印を解かれる方はほむべきかな。

讃三五四「かいぬしわが主よ、迷うわれらを、若草の野へに導き給え、われらを守りて養い給え……」

☆ ☆ ☆

頑なな私を打砕こうと、サウロのような体験をさせて下さつた。光に照らされ全く打ち伏せられる時、もはや自分の知識に頼ることはできない。「主よ、何をなすべきでしょうか」と無条件降伏すると、すぐ答があつた「あなたの師は再び隠れることはない……」「火の柱、雲の柱をもって導く神が居

られる……」と。父が愛子を戒めるように、愛の干渉をして下さる主はほむべきかな。

讃二八五「主よ、み手もて引かせ給え、ただわが主の道を歩まん」



「神の手の中で」

塚本敏子

最近の礼拝の時、榎本先生が若い頃、生きるに生きれなく、死ぬに死ねない思いをされた話をされました。それは私のありさまです。

人間は、死ぬ為に生まれて来ているように思われて仕方ありません。赤ちゃんや小さい子供を見ると苦勞しにこの世に生まれて来たようなものだなあーと感じます。

私は腎臓病で悩まされています。体がだるくて、きついのです。働く事も何もできない事ほどつらい事はないようです。この状態が良い方向に向うか、死ぬか、どちらかに早く行きたいのですが、残念ながら、自分では何一つできません。生きる事も死ぬ事も、すべてが神の手の中にある事を、つくづく思い知らされました。

聖書を手にして早や二十年経ちましたけど、御言葉が事実であったと信じられるようになったのは、腎臓がひどくなつてからのようです。肉体は亡んでも魂は救われました。主を見上げるのに長い月日を用いましたが、腎臓を通して主に寄り近く歩む事ができ、幸いです。

「草は枯れ花は散る。しかし主の御言葉はとこしえにのこる」(イザヤ四〇・八)

この御言葉を讀んだ時、全身に電気が通ったように体が熱くなりました。地球が亡んでも、神の御言葉はとこしえに残る。神の偉大さに頭が下がります。



「あてがれ ミレ一の晩鐘 祈り」

野 口 米 子

我が家のレコードキャビネットの上に一枚の粗末な絵がある。農具をそばに置いた二人の農夫が、手を組み頭をたれて敬虔な祈りを献げている。云うまでもなく「ミレ一の晩鐘」の小型の複製画である。

そして絵の上の方に、「まず神の国と神の義を求めなさい」と書いてある。

絵の事は解らないが、二人の農夫の祈りの姿に強い憧れを抱く私なのである。

私の日常の祈りの姿を置きかえてみると、それは目もあてられない絵が現われてくるからだ。

まず朝一番の祈り、床の上に取り上がり目をつむり手を組んで、「天のお父様あなたを崇め讃えます。今朝も健やかさをもつて……」と祈りは始めるが、ぱっちり目覚めたはずなのに余眠がおそってきて、頭がだんだん下がってきて、遂にはその頭が床にひっついて上半身を頭で支える不格好な形になってしまふ。私の一日は、この不真面目な祈りから始まる。

主人を送り出すと、さあ仕事と、家事は娘にまかせて編機の前に坐る。

ジャー、ジャー、彼女の手はキャリッジを握り編んでいるが、その心は神様に一途にむいて口には祈りの言葉が絶えず……とは嘘で、手は右に左に動いているが、その耳はラジオの音でいっぱいなのである。それでも神様に対する心があるらしく十時・十一時・十二時の時刻になるとキャリッジから手が離れて、ラジオのスイッチを切る。そして僅かな時間に祈りはじめる。目をつむり手を組んで……ではなく、こゝでも怒の罪に支配されて、口では神様を讃めたたえ、手はタッピで止め目をしたり配色糸をかけながらキャリッジを左右に絶え間なく移動させているのである。

夕方になって仕度のおそい食事のにおいが流れて来て「おいでよ飲よ」の娘の声に空腹と疲れを覚えながら、糸屑とほこりだらけの自分の部屋を出て食卓にどっこいしょと坐りこむ毎日である。そしてあゝ今日も元気に仕事をさせてくれてありがとうございますの祈りもそこそこにご飲を頂く私である。

ミレーの晩鐘、美しい。私も以前農作業をしたことがある。それは重労働でそれはきつい。その作業を一日中して夕方に

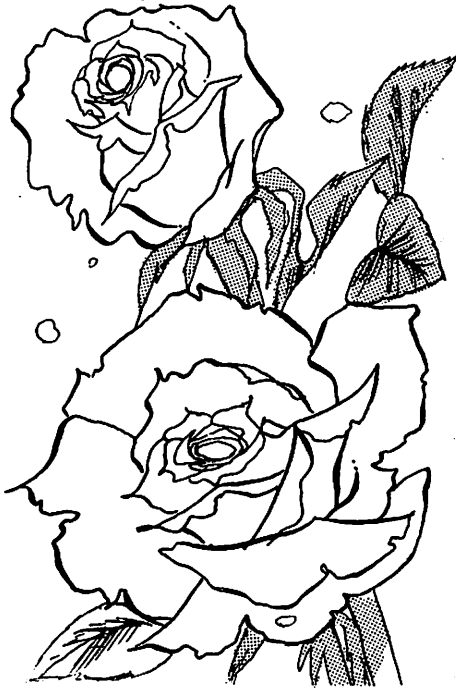
なつてあの様に立つて鐘の音のひびく畑の中で祈る。

まさにこれは、私にとって憧れのほかななものでもない。さしずめ私ならもうしゃがみ込んで、いや、ボタンとお尻を土の上におとして、やっとな神様有難うございました、と言うのが関の山だろう。

なのにあの二人は立つて祈っている。すばらしい。神様は内側を見て下さるのだからと、自己満足するむきもあるが、いくらなんでも寝る前はちゃんと正座して一日の感謝を……と多くの方がなされている様に人並みに……と思うが、又これ又期待はずれで違うのである。

入浴を済ませると、又どつと疲れがおそつてきて、聖書も一章も目を通せば上等で、じき床の上に横になるのである。そして横着にも寝床の中で、それでも手は組み目をつむって「今日も霊肉共に恵んで下さいまして……」と祈りはじめる。幸にも寝つきの極めて悪い方であるからお祈りがおいねりになる心配はない。

だいたい私の祈りの姿は、みっともない、みっともない、とうてい絵にならないが、まあ少しはましなのは玄関口での主人を送り出した後の祈りの場であろう。しかしこんな祈りでも神様は、一つ一つ答えて下さった。



早く身も心も神様に敬虔に祈りたい願望でいっぱいである。だからよけいにミレーの晩鐘にあこがれるのである。ところでこれを読んで下さった方達はおっしゃるだろう。祈りもまともにできないのによくこの駄文を書く時間と精力があるなあと……。私は答えます。これは神様からもらった楽しみの一つである……と。

「信 頼」

岡 嶋 ミヨ子

。 ひまわりの 色あざやかに 天高し
太陽に向って咲く花、ひまわりは美しい。殊に九月上旬に
咲く小型の花は、あちこちの庭の片隅に精いっぱい咲いてい
る。ママが昨日もいっぱい郷里のお母さんからもらってきて
くれた。私は何より嬉しくて、今朝花びんに挿してまわった。
先ずお茶室に、そして洗面所に、応接間に、孫達の勉強室に
ノ 今日の家はオールひまわりだ。これは全く祖母さま
のおかげであり、やさしいママさんのおかげだ。私は心から
感謝すると共に、こゝまで私達を結びつけて下さった神さま
のお恵みに心から感謝している。そして人と人とのふれあい、
家族とのふれあい、現世に生かされている世界人類のふれ合
いがどんなに大切であるかを痛切に感じる。特に私達はこの
十数年老人二人だけのさびしい生活であった。それが四月か
ら三倍の大家族になった。中でも小中の孫二人のおかげで大
にぎわいだ。かなり広い応接間の窓ぎわに二つの机が並び、
背後に二段ベットが坐る。兄の机には書物がどっさり立て
られ、妹の前には本よりお人形さんが多い。

中一の兄は電子工学部員としてクラブ活動をやる上にL.L.教室に週二回通っている。テープでよく英会話のけいこをしている。又趣味としてプラモデルが大好きだ。小遣いの大部分はそれを買ひ又ラジコンまで買って組立てて動かして見せる。小二から六年迄剣道をやったそうだが、転校して中学生となつた途端中止。在京中スイミングクラブで鍛えた体は、プールには入ると生きかえつたように元気になる。

さて妹小二は、ピアノと習字の教室に通っているし、八月十四日からの水泳教室ではわずか十日の間に色々の泳法を覚え、ラストの試験の日二五米を三十三秒でおよぎ合格、成績もオール「よい」の所に○がついている。とてもはきはきしてファイトのある子だ。大きくなつたらピアノの先生になると言っている。

ちなみにこの子達は二人共帝王切開で生まれ、九死に一生を得た子供で、全く奇蹟としか思われぬ。神様は私達の願いをききとどけて下さって、何よりも尊い幼い命を守って下さつたと、今更のように感激している。

さて、私達二人共白髪で益々元氣。私は毎朝五時頃起きてジョギングに出かける。きれいな空気を胸いっぱい吸いながら、大手を振ってオイチニ・オイチニと歩巾も広い。団地を

約半分の正方形に歩く。めつたに人にあわないが、時たま走ってくる青年にあつたり、早出の車にあう位なもの。約十分位歩いて帰つてくると、まだ起きていないので電氣釜のスイッチを入れて静かに休む。

神さま有難うございます。今日も元氣でジョギングができました。今日又一日感謝の日が送れますように。と折りながら目をつむる。

七月一日は、私の満七十五才の誕生日だった。赤飯をたいてくれ、色々と料理を並べてくれたが、中でもうれしかったのは孫たちのプレゼントだ。美紀は二、三日前から折紙で数十羽の大小のツルを折って数羽づゝ糸でつなぎ、それをピンクのビニール紐にたばねたネックレースと私を写生した大画面紙。私を椅子にかけさせ、ブルーの洋服に七色のたて縞のスカートを着せ、赤い靴をはいた私の姿。両方に76才のおたんじょう日おめでとうと書いて、裏には

「おばあちゃん、美紀は、おばあちゃんに長生きしてほしいと思つて絵を少し若く書きました。洋服もちよつとおしゃれにしたよ。美紀がおよめに行くまで生きてゝね。そして病氣をしないように注意してずーっとずーっと長生きしてネ。」

と幼な心に私の命を考えてくれていることを思うと目頭があつくなってくる。

中一の男の子は、小さい本を二冊くれた。「日本人漂流記」と「愛するところに神あり」私は嬉しかった。孫から本をもらおうとはネ。

私は神様から選ばれ、キリストイエスによって神の子とされ、全き道をたどろうと努力している。しかしサタンは色々な形で私迄引きずり下そうとする。そんな時私は小さく心がゆれる。

しかし私は大丈夫だ。

「心をつくして主に信頼せよ。

自分の知識にたよってはならない。

すべての道で主を認めよ。

そうすれば主はあなたの道をまっすぐにされる。」

(箴言三・五一六)

このみ言葉は片時も忘れてはならない。私は主をあがめ、主に頼るより外に何一つできない。小さな弱い人間であるから

アーメン

肌寒を 感じそめたり 今朝の庭

朝夕の気温が日に日にさがる。こうした気候の変り目に風

邪をひき易い。一昨年から昨年にかけて入院していたおじいちゃんも、今は元気で毎日暮ばかり打っている。何分心不全なるものが奇蹟的に助かっているもの、いつ不全になるかわからないが、それは神様のみが知ること、私が心配してもどうにもならない。私は只その時が来ても驚かない心を養って置けばいい。日本で初のノーベル賞を頂いたあの湯川さんさえガンには勝てなかった。あの方が或年の夏期講習で、私たちのために「中間原子論」というものを話して下さいました。あれは私がまだ二十代で希望溢れる娘時代であったことを覚えてい。この様に偉大な日本人が世界の各地で今でも活動していることを知る。

人間として生れた以上、ラストまで人間らしく何かの足跡をこの世に残しておくことが必要である。物を残すか、心を残すか、物質文化か精神文化か、どちらも大切だと思うが、これを受け継ぎ更に発展させる人々の心に強く植えつけておかねばならないのは何だろうか……。

みんな考えて見よう。

『わたしの愛のうちにいなさい』

小 松 南 子

「わが神、主よ、わたしはあなたをあがめ、世々かぎりなく
くみ名をほめまつります。

わたしは日ごとにあなたをほめ、世々かぎりなくみ名を
ほめたたえます。

主は恵みふかく、あわれみに満ち、
怒ることおそく、いつくしみ豊かです。

主はすべてのものに恵みがあり、
そのあわれみはすべてのみわざの上にあります。」

主の聖名を崇め感謝申し上げます。

今年、結婚二十年を迎えさせて頂きましたが、未信者の
主人と結婚し、しばらく教会を離れてしまつて亡びにいたる
べき私を、たゞ十字架の御血によって清め、愛と、あわれみ
と恵みの内に、二十年間、豊かに過させて頂きました。

『我限りなき愛をもって汝を愛せり。故に我絶えず汝を
恵むなり。』

そしてこのたび娘が救いに与るといふ大きな恵みを頂き、

感謝しても、感謝しきれずして、つたない文ながら、お証し
させて頂く事によって、神様に栄光を帰する事ができればと
筆をとりました。

丁度一年前、娘は大学受験という大きな岐路に立っており
ました。皆様もいろいろご経験をなさったと思いますが、私
も初めての事で様子もわからず、娘と共に進路の問題で思
なやみました。私は短大でもと楽な道を考えましたが、本人
が四年制をと願ひ、学校の先生からも薦められて、国立・西
南大・私の願ひで西南短大と道をきめました。それからは、
神様を知らない娘は勉強との戦いに、私は信仰との戦いとな
りました。

一月十一日共通一次試験、私の祈りとは裏腹に、又娘の努
力の甲斐なく、裏目裏目が出て、実力が出せず、娘は一夜を
泣き悲しんでおりました。しかし神様は、必ず娘にふさわし
い道を与えて下さると信じ、娘も又私大の問題に取り組みま
した。私は夜食を作つては庭に出て夜空を仰ぎながら、すべ
てを主に委ねて祈りました。『ああ主なる神よ、あなたは
大いなる力と伸べた腕をもって天と地をお造りになったので
す。あなたにできないことはひとつもありません。』

しかし私大の発表の日、自分の力を信じていた娘は又もや

谷底へ突き落されてしまいました。もう試験を受けるのが恐
くなつたと弱音をはいておりました。

『恐れることはない、ただ信じなさい』

『ヤコブの神をおのが助けとし、その望みをおのが神、主
におく人は幸いである。』

『患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は
希望を生み出すことを知っているからである。』

と御言葉を与えられ、娘にも書き送りました。娘も又すぐ心
和らぎ二次試験・短大と勉強に取り組みました。

『あなたは、もはや泣くことはない、主はあなたの呼ばわ
る声に応じて必らずあなたに恵みを施される。主がそれを聞
かれるとき直ちに答えられる。たとい主はあなたがたに悩み
のパンと苦しみの水を与えられても、あなたの師は再び隠れ
ることはなく、あなたの目はあなたの師を見る。』

主人は最悪の場合は浪人でもと考えておりましたが、私は
必ず、神様が道を開いて下さると言い切っておりましたので、
なんとか家族の救いの為にも祈りに答えて下さいと、丁度創
世記三十二章にヤコブが神の人と組打ちした様子が記されて
ありますが、私も同じ気持ちで朝となく昼となく夜となく祈
りました。

『そして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神とな
る。』

『わたしは彼らと永遠の契約を立てて、彼らを見捨てずに
恵みを施すことを誓い、またわたしを恐れる恐れを彼らの心
に置いて、わたしを離れることのないようにしよう。わたし
は彼らに恵みを施すことを喜びとし、心をつくし、精神をつ
くし、真実をもって彼らをこの地に植える。』

と御言葉を頂きました。

そして三月十八日西南女学院英語科合格の通知を頂きまし
た。主人も私も初めは希望していた学校でもあり、娘も自分
に与えられた道と皆んなで感謝致しました。今ままであまりに
も恵みの中を通させて頂いた私共には大きな試験（試験と言
うのは少しはずかしいのですが）でした。しかしそれは神様
の愛であり、ご計画だったので。

『目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもし
なかつたことを、神はご自分の愛する者たちのために備えら
れた。』

今迄幾度となく教会に出席する様にすすめてきましたが、時
間がない（往復二時間近くかかりますので）、行きたくない
と拒否致しておりました娘が、学校から帰るなり『お母さん

クラブで聖歌隊に入っちゃった』と言って私を驚かせました。(今迄クラブはスポーツや絵で夢中だったので。)

それからは、時々教会にも出席する様になり、又学校でクリスチャンの良きお友達を与えられて、八月二十五日日本キリスト学生会のキャンプに出かけました。

そして二十七日夜十時過ぎだったでしょうか、昨日は娘の十九才の誕生日でしたが、なんのお祝いをしてやる事もできませんでしたので神様からの祝福があります様にと祈っております時、娘から思いがけない電話でした。何の用事だろうと思つて名前を呼びますと『お母さん、お母さん』と泣くだけで話す事ができません。吃驚して『どうしたの、どうしたの』と言いますと、お友達が電話に出られて、『今瑞枝さんが聖霊に満たされて神様に従つて行かれる事を決心されたのです。』と言われ、私は只有難く感謝致しますと言つて、娘に替り、お母さんも祈っているからねと言つて電話を切りました。ほんとうに思いがけない事でした。あちらの様子が全然わかりませんので一抹の不安がありました。祈っている内に心が安まり、神様の深い深いご愛とご臨在を感じ感謝と感激で一夜が過ぎました。

神様はおろかな母親(子供の救いの為神様に組打ちするは

ど祈つたことがあるでしょうか。)を許して下さい、愛の故に、娘の入学試験を通して娘を整え、思いもしなかつた救いという、一番大きな喜びを与えて下さつたのです。そして十年間祈りの内に大きく成長した娘が今私の手元をはなれ、神様の子として新しく生れ変わり、後はすべて娘が祈りながら人生を歩み、神様が道を備えて下さるといふ安心感(肩の荷をおろす)と言う気持ちで只々感謝でございました。それと、時々に応じて、御言葉を与えていただきましたが、そのお言葉がすべて成就された事感謝でございます。

翌日、娘が帰りました、いろいろ話を聞き、又清められた娘の顔を見て、主の愛とご計画を二人で感謝し、又娘の為に永い年月祈つて下さつた先生初め多くの方々の祈りを感謝致しました。それからの娘は何時も神様を讃美しながら、宣教師の方々や信仰深いお友達とお交りを持たせて頂き、日曜日には私と神様の事を話しながら教会に行くと言ふ夢の様な毎日でございます。

私と長女がいつも楽しく話しているものですから、次女が僻んでしまう時もありますが、その内きつと主人も次女も神様の救いを受ける時がくる事を信じております。本当に私達家族の為に何時も、教会や海老津の家庭集会、又多くの方々

が陰にあつてお祈り頂き、ここまで恵みを頂ける事ができました事、只々感謝にたえません。本当に有難うございました。又ぶどうの木の大切なページを私共の為に与えて下さって有難うございました。私達親子には一生忘れる事のできない思い出となる事でしょう。

次に掲げました文は娘がキャンプの時、お世話になったお友達へ出した手紙の下書きですが、娘の気持がすこしでもお証しになればと思います。どうぞこれからもお祈り下さいます様お願い申し上げます。

☆ ☆ ☆

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたをたを選んだのである。」

このお言葉ほど今の私をあらわした御言葉はありません。本当にこのお言葉の通りだと実感するんです。

証しの時にもお話ししたように私の母はクリスチャンで赤ん坊の頃から神様のことを聞かせてくれたという恵まれた環境に育ちました。小さい頃から神様のことをすんなり受け入れていたようです。たゞ実在感を感じることができませんでした。

例えば、小さい頃からよく歌っていた讃美歌四六一番『主われを愛す……』と歌っていたながらも、本当に歌詞を理解することはできず、ただ小さい子供が意味もわからず歌謡曲をうたっているようなものでした。私の今までの神様に対する接触も全くこんな風でした。だから、お祈りはしていても、中・高と教会に行かないようになっても罪の意識を感じなかったし、なんでも自分の力でやるんだなんて意気こんだりしていました。しかしそんな私でも神様は見捨てずに教会に呼びもどして下さい、ご聖霊まで授けて下さいました。

実際、何かに悩み苦しみ、何かに救いを求めていたというわけでもなく、自分としてはいつの間にかここまで来たという感じでした。西南女短という大学に私を導き、先輩達にめぐり会うことができ、K G Kに参加することができた。本当に神様のお導きを感じるのです。K G Kに参加できたこと、本当に感謝です。K G Kって本当にすばらしいですね！ 私は今まで同世代のクリスチャンの友達をもったことがありませんでした。(私の教会はわりと年輩の方々が多いので)ましてやあんなにたくさんのクリスチャン達が集まってさらにキリストの愛を知ろう、伝道しようという情熱には本当に驚くばかりでした。私はK G Kたるもの何も知らなかったので、

教会でよく行われる夏の林間学校程度のものだろうかと思っていました。ところがどうでしょう。静思の時をはじめ、聖研、伝道メッセージ等々のプログラム、同世代のクリスチャン達がこんな熱心にやっているのかという驚きと共にうれしさも感じました。はじめは、そんなみんなにちよっぴりひけめを感じていましたけれど……でもそんな風に感じたのもつかの間。グループで神様の愛のことを話しあったり、人生感、将来の職業、結婚についてなどまで話は発展し、楽しく有意義な時間をたくさんもって、本当に感謝のかぎりでした。

又、忘れることのできない八月二十六日、私の誕生日である日にご聖霊が授けられたように思われます。あの荒瀬先生のすばらしい伝道メッセージ、キリストの愛と十字架のお話、その晩、布団の中で、そのお話のことや、今まで私の為に祈って下さった方々のことを考えていると涙がでてきてとまりませんでした。

そしてあの二十七日の、三日間分を集成したすばらしい伝道メッセージ。本当に来てよかったと実感しました。神様のみわざだと実感しました。K G K って本当にすばらしい。私もこれからK G K の活動に参加させてもらいたいと願っています。

*Now I lay me down to sleep,
I pray the Lord my soul to keep;*



*and if I die before I wake,
I pray the Lord my soul to take.
(From Mother Goose)*

手術を受けて

久保田 宮子

健康だけがとりえと自負していた私も、子宮筋腫と言う病気になり、入院する事になりました。家族も助かるただそれだけの理由で家から近い当病院に決めたのですが、長く入院している患者から耳にする言葉はショックな事ばかり、結局産科はあっても婦人科はなきに等しい病院でした。

検査のための十二日間は辛くて辛くて一日をこれ程長く感じたことはありません。私に全くの信仰がなかったら逃げたことでしょう。誰が悪いのでもない、自分が決めた病院だからと観念し、暇ある毎に「主の祈り」と「恐るる勿れ只信ぜよ。」と唱えました。

手術の前日、妹が明るい顔で「お姉さん大丈夫よ。神に祈ってあげてるから」と言った時、今まで堪えていた気持が爆発して声をあげて泣きました。

当日は不思議に心が楽になり、手術も無事に終り、一晩中痛みも全くなく、先生や看護婦さんから品行方正の患者だとお誉めの言葉を受けました。抜糸までの一週間は大変でしたが、その後は順調に回復致しております。

野村先生ご夫妻、伊規須先生をはじめ岩井様、上島様ご夫妻とも思いもかけぬ方々のお見舞を頂き身にあまる感謝の祈りを捧げて頂き嬉しくて泣きました。人間一人では生きていけないと日頃から思っていました。初めての入院生活を送りひしひしと感じました。

妹が口ぐせの様に「神様は祈りに答えて下さる」と言う意味が本当に良くわかりました。感謝でいっぱいでございます。

最後に個人的な事ですが、仕事から追っかけられている主人ですが、一ヶ月の入院期間中、面会時間が五分しかなかった日もありましたが、毎日見舞ってくれて有難う。娘二人も「なせばなる」の精神でよく頑張ってくれて、退院して驚いた事に、私がいいた時以上に家の中がよく整理され嬉しく思いました。これからは信仰を中心にした生活を送りたいと思います。宜しくご指導くださいませ。

術おえて 熱きタオルで体拭く

婦の顔われには 神に見えにき

詩

「レプタふたつ」

首 藤

正

やもめは入れた
ふたつのレプタ

神殿の箱に
手にある全部

献げてしまった
生活のすべてを

人知れず、そっと
献げた感謝なのに

主は見ておられた
なにもかも

望みを神につないで

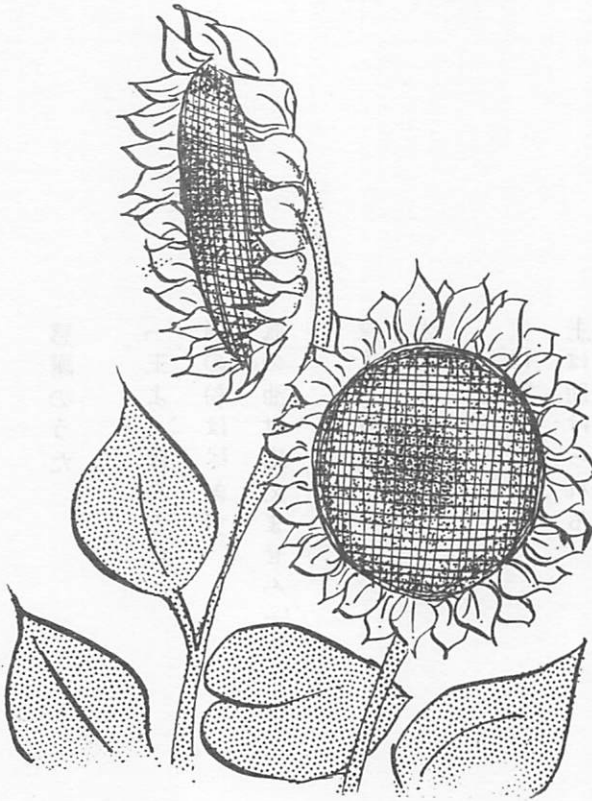
献げるものを

ひとはわからぬし

おしはかりもしない

けれども主は知って

受け入れて下さる



主は知って

よろこんでくださる

とはいえ

誰が知ったであろうか

このやもめの夜

誰が思ったであろうか

髓と脂でもてなされる

ゆたかな夕餉ゆうげ

主は飽き足らせて下さった

やもめのたましい

主は臨在をもって

めぐみに恵まれたので

やもめは歌った

感謝のうた

「主よ ほんとに

桶の粉は尽きず

瓶の油は絶えません」

深まる感謝と

強まる信頼

主は顧られ

主は助けられる

主は 盾となって

蔭におおって下さる

その翼の下から

世の中を見れば

おそろしいはずのことから

刺^{とげ}が消えて

あるものは

休息と 平安のみ

秘密とは何？

これこそ真の秘密

だれも損うことができず

だれも奪いとれない

天に蓄えた

無限の宝

レプタふたつ

これぞ真珠

どんなもちものよりも

価値あるたから

主は好まれる

大より小を

主は目をとめられる

華やかよりもいのち

着物よりか^{からだ}身体を

食物よりも生命

行為よりか信仰を

結果よりも^{こころざし}志望

犠牲よりか^{あわれみ}憐憫を

献身よりも^{ゆるし}寛容

誇りよりか^{へり下り}謙遜を

支配よりも奉仕

富よりか貧を

喜びよりも悲しみ

楽よりか苦を

成功よりも忍耐

喝采よりか従順を

上手よりも即答

ひたすら頼る病人と

ゆるしを乞う罪人

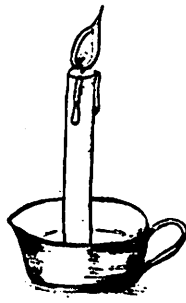
叫び求める盲人と

へり下る異邦の母

ベタニヤのマリヤと

マグダラのマリヤ

主はいまも求めておられる



レプタふたつ

砕けたたましいと

おののくこころ

シロアムの池にて洗う

岩 井 芙美子

八月卅日、卅一日シロアム会の九州地区修養会が会長の大
口種義、和子ご夫妻により、日本点字図書館長本間一夫先生
をお招きして、北九州ハイツを会場に開かれました。

私ははからずもこの会に出席させて頂く事ができましたお
話を伺い又皆様に接し、神様がお一人お一人の内に現わされ
ております奇しき御業を拜しますと共に神様のご真実、主に
ある聖徒との交わりの喜びを味わい感謝でした。

開会 第一日

八幡駅待合室には西東北南から集まって来られた盲信徒の
方、附添いの方廿一名、再会を喜び無事を喜び合い、二時き
っかりハイツさし回しのマイクロバスに治まって出発、会場
到着と同時に走りよって下さった西南女学院やボランティアの
方に手を取って頂いて受付をすませました。会場には先に見
えた方も加えて五十余名、前面に大きく掲げられましたヨハ
ネ九・三、コリント(2)四・八のお言葉にイエス様の限りない
御愛を深く思い、思わずアーメンと感謝致しました。

八幡東バプテスト教会家近様の司会で讚美歌三二一を讚美

し、会長様のお祈り、この中で生ける主の証人としての本間
先生に深い憧憬を寄せられる盲信徒の方々の思いを身に感じ、
私もはじめて先生のお顔の柔さに接し、これから開かれよう
とするこの会合が何であるかを自分に言いきかせておりまし
た。

先ず聖書のお言葉が朗読されました。私は皆様からお招き
を受けまして此処に参りましたが信仰的には乏しく、皆様の
ご期待にそえられるとの自信はございませんが、日本点字図
書館と共に歩みました四十年を通し、様々な危機を神様を信
じて救われてきたことをあかしとし、体験しましたことをお
話し致したいと思えますと先生は静かに語りかけて下さいま
した。

大正四年北海道増毛の町に生れ、幼なくして母と死別し、
父とは引き離され、叔父の手によって育てられ、五才の時脳
膜炎で失明、あらゆる手を尽くし又法華教に心を寄せたり苦
もの日々。同居の一老婦人の熱心なキリスト信者のすゝめ
で初めて聖書に接し、十三才で函館盲啞院に入學、点字で本
を読む事を覚え、キリスト教的雰囲気の中で諸先生との出合
い、又点字図書からの影響を受け、徐々に一番大切なものが
キリストを信じて強く生きることを知り、この事を通して点

字図書に対する思いを強くし、昭和十一年当時盲人の爲にも門戸を開いて下さった関西学院に入学、毎日禮拜堂に流れる「主よみもとに近づかん」の讚美歌に感動、禮拜にかゝらず出席してキリスト者としての方向に備えられ、十二年の春に受洗、今日あることを信仰によるものと感謝、更に十八年結婚、教会生活に熱心であった奥様の励ましは大きく先生を支えて下さったそうです。

昭和十五年十一月 日本点字図書館を設立、周囲の方の力添えで形も整った十九年、当時の本は皆手書きで一冊の本も焼失してはと疎開、そして待つ事四年、あせりを、聖書を読み奥様の力づけによって耐え、二十三年ヘレンケラー女史の来日を機に再び東京へ。それからの数年間各地から本は寄贈され、仕事は増し、家には本の置場に困り、加えて図書貸出しの方の収入は全くないところから日を追うインフレに生活は勿論、点字機の購入、職員の給料と二十五年には初めて寄附金を寄せて頂いたものの全く行き詰まってしまわれた由、しかし、この時の自分を救われたのはまさしく信仰であったと力説されました。もし信仰がなかったらあの時自分の進路は変っていたであろう。勿論、自分が変えたとしても盲人の必要からその仕事は盛んになることは間違いないが日本点字

図書館の事業の形は変わっただろう。というのは自分はこの事にふさわしくない人間ではないかという懸念、しかしこの時ヨハネ九の「たゞ神の御業の現われんがための失明であつた」といつも先生の心を励まし、又コリント(2)四章を繰返し繰返し読み口ずさむことによつて、詮方つきれど望みを失わずと心明るくなった由。人間の世界から仕事の手はのべてくれるけれども、その世界からは自分の逆境をかえてくれる救いはない。しかしこの仕事が神の御旨に副った仕事であり、日本の盲人の爲に必要なことは間違いない、今は逆境におかれてはいるけれども、神様はきっとこれを見ていて下さつて助けの手をのべて下さると信じて奥様と祈り、じつと苦しみ耐えた事がいついつまでも力となり、奥様との語り草となられました由。そうしているうちに昭和二十八年、思いもかけず朝日社会奉仕賞を受賞して世に認められ、三十年から厚生省の予算を受けられるようになりました由。

四十九年突然奥様に先立たれて、そのショックは大きく、信仰的に励まされ、家庭を顧みることなく仕事一筋に歩むことができたのも共に忍び通してくれた妻、しかしそこで「わたしはよみがえりであり命である」のお言葉に非常に励まされ、これもみ心なりと人生の基盤を立て直し、長男ご夫妻の

助けを得、又点字図書館にも多くのキリスト者を与えられた。今後も自分が救われた幸せのみに止まらず盲人福祉伝道協議会長としての場を盲人が信仰を持つという事がすべての解決の鍵であると信じ、現実には困難が多いために勇気をもって伝道に力をつくしたい。盲人の為に世に福祉は叫ばれているけれど、このシロアム会が北九州の地に燃えつづけた信仰は尊い神の御旨に副い大きな力です。

北海道の片田舎に育った自分が失明したことによって特殊な道を歩み、立派な先輩にも逢い、キリストの信仰に導き入れられ、測り知る事のできない神様の恩寵をしみじみと知る者です。六十五才の生涯を通し、表には点字図書館長としておかれている自分の隠れ勝ちな陰にあるものをご理解頂けたし感謝です。と

先生をとおし神様は切々とご自身を現わして聞く者の胸を打たせて下さいました。用いようとする者をあくまで捨てず、試みためしてみ心の成るまでに練りたまう主の御愛と御真実、きよめる方ときよめられる者をつとなす為に、御子の血をもってその御業をおしすすめたまいし神の、そこでは正視者と呼ばれることの偏見をくつがえすべく失明も又恩寵と語らしめ、主にあつて忍耐することが如何に尊いかをこんこんと

教えられました。

皆様と玄関前に出て記念撮影、夕食、霊肉共に満たされて懇談会場へ。八幡東バプテスト教会の綾塚様の司会で「眼には見えねどわが側にましまして」と聖歌五九五を讚美、夫々自己紹介の最後に、これまで陰の様に附添つておられた丹羽先生のおあかしがあり、牧師の後継ぎとして迎え入れられた先生が重荷から飛び出し本間先生の許で図書製版に当つておられるうちにご自身の内に宿つて下さったイエス様をまことの命の光とし救い主として受け入れさせて頂き、身は本間先生にお任せしているけれど、今は生けるイエス様にお任せする事の使命に燃え、全力投球の場として家庭集会をもたれあかしのご用に当つておられます由。エペソ一章、五章のみ言葉をもって、神様の選びの導き、十字架をとおしてきよめられた身のおどろくべき恵みを証され、その敬虔なお姿に本間先生とは又違った親しみを感じました。入浴を済ませ、今日一日の恵みを感じ、やみに光る皿倉の灯を見つゝ就寝。

第二日目

七時からの早天祈祷会は、ヨハネ一・一三のお言葉で大口径夫人の祈りをもって進められました。この朝大分県から唐島様はじめ四名の方たちも加わり、昨日の緊張感もほぐれ

朝食のあと本間先生二回目の講演の頃には、榎本先生と奥様、伊規須先生も会場にお見え下さいました。

この日はローマ人八・二十八のお言葉をもって先生が点字図書館長として歩まれた四十年間をとおして深くかわりをもつて下さった面において図書館の経過と現状、今後の展望と先生が師と仰いだ諸先生とその著書と内容等、そのお働きについて語られ、この図書館活動によって、外ではなく先生ご自身が一番神様から恵みを頂いたと感謝されておられました。そしてこのあと開かれまして感謝発表会におきまして信徒の交わりを修養会で持たして頂いた事を大変喜んで下さいました。

二日間をとおして集わして頂いた喜びを会長様をはじめ皆様が感謝会席上で体いっばいに現わされておられますお姿に、神様が此の度のお言葉どおり神の御業の現れんが為なりと御子を長子とし、分け与えられた肢体として尊く用い又夫々つかわされております様をまざまざと拝し、感謝讚美の上に坐し給う主によって、み国に住ませて頂いている心地でした。

終会は大坪様の祈りではじまり、マタイ伝七・二四のお言葉で酸ヶ丘バプテスト教会藤井先生がイエスキリストを土台としてゆるがない信仰をもって築きあげてゆく力強さを教え

導いて下さいました。先生も又光さえ感じられないでいつもご母様とご一緒ですが明るい笑顔は満面にあふれ、力強いお証しは会場に大きく広がってこの修養会の最後を高く盛り上げて下さいました。

ご自身を誇る事なく、一あかし人としてご来訪下さいました本間先生に神の栄光の為によりき御働きを一同心あわせて祈り、三八五番を讚美し、今回の修養会がこれまでになく喜びのうちに終了したことを互に語り合い、別れを惜しみつゝ帰途につきました。

大口様ご夫妻と八幡東バプテスト教会綾塚様の祈りをもつて建てあげられた北九州シロアム会が今年で十三年目を迎えて群となり、神様のともして下さった永遠のいのちの恵みが信じる者にわけへだてなく光を放って私達見る者をして驚く程の明るさがそこに輝いています。その事を今一度振り返り、その一つも地に落ちることはないと御真実を守りたまうわたしたちの主イエスキリストの御いさおしを心に留めさせて頂き、そこに押し出して下さいました。主の御憐みに生かされて行く望みに新たに眼をぬぐって頂きました感謝でいっばいでございます。再生の洗いを受けながら己れを立て、イエス様の御いさおしに心そむける私に、今回の修養会はまことに

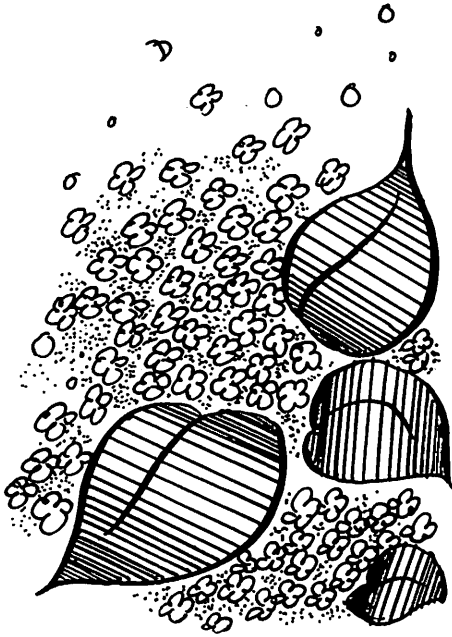
「シロアムの池に行つて洗いなさい」との憐み深い主のみ心
でしたと申し上げるほかはございません。

「たえなる恵みや 天なる御門は

わがため ひらかれたり」 讚美歌五〇五番そ
のものでございます。

二日間をおし共にあいまして喜びを分かち合いましたお一
人お一人の上に現わされました油のしたたりに書きつくせな
い思いを残し、豊かな主の御祝福で報いて頂けますように、
又修養会の為にお祈り下さいました教会に神の栄光の限りな
くございますように。

心より御礼申し上げます。



「ある日、或時、」

伊規須 泰 子

(1) お迎えにきたおかあさんの笑顔に、体をゆすりながらた
どたどしく走って行く一才の子、背なに当る陽陰はもう長
い。手を出して飛びつく子、しっかりと抱きあげ頬ずりす
るおかあさん。保育所の夕方の一こま。

母と離れて一所懸命生きた一日、泣いた、笑った、こぶ
をつくった、眠った、そして待った、なつかしいおかあさ
ん。どんなに保母が可愛がっても、子どもにとってやっぱ
りおかあさんが一番。私たちだってイエス様が一番。イエ
ス様のふところにとび込もう。

(2) 鉄棒で遊んでいて落ちて左腕上膊部を骨折した女の子、
保母たちは青ざめた。一瞬の空白、祈る、なすべきこと教
えられ、副木をし風呂敷で吊って病院へ連れて行く、母親
へ連絡をとる。子どもの怪我ほど心を痛めるものはない。
病院も二ヶ所のみてもらい、遂に即刻入院、検査治療の後
手を天井から吊って固定されてしまった。それから毎日お
見舞。どんなにか大変だろう、不自由だろうと思っていた

が、なんとまあその子の明かるいこと、順応性のあること。入れ代り立ちかわりのお見舞を喜んで、左手は使えないが、寝たまゝ右手と両足を実に器用に使って生活している姿に、全く驚いてしまった。この順応性、与えられた環境を主を知るチャンスとしてしまったらすばらしい。見ないでほしいと思った。

(3) よく、子どもが見えなければ駄目だ、など言われる。わかった様な顔をして他人に言ったりもする。が、或日或時これだ、と思うことがある。その子のあらわれている行動の原因が見える。背景にある深いものからこの行動が出てきているのだと感じる。又この子は次にこう言うぞ、こうするぞ、とわかる。こういうことが子どもが見える、という事ではないだろうか。

ちがう話だがオルガンを弾いていて、オルガンがよく見えることがある。それは芸術とは全く違った感覚であろうと思うが、譜と弾いている鍵盤が見えて、弾いている指がちゃんとそこに行く。音感の乏しい私は魂で弾かず、眼でひくのみであるが。

又聖書を読んでいて一つのみ言葉が見えだすことがある。

その時は、そのみことばのみに止まって深くは入っていく。「見える」という言葉でいろいろ味合う。

(4) 私は非常に内向的な性格と想っている。言わないですむなら、なる文言わずにおこうという気持がいつも働く。しかし職場では立場上そうもいかない。常に声かけもしなければならぬ。大勢の前でも言わねばならない。嫌なことも注意したり、又、どうしても言わずにおれないこともある。そして訓練を受けている次第だがなかなか稔らない。が、それ故に内気な子の気持が手に取るようにわかる。それと戦っている子の苦しみもわかる。それがどこかで爆発する痛みもわかる。内気な子はよく私の所に来る。用事があるとき私を通して達成しようとする。この子もずいっと苦勞するな、と感じながら、そんな役割は仲保者のようだなと、思いはイエス様のこと走る。

(5) 子どもたちが、さあ、七、八人かなと庭の隅で頭を寄せ合っている。何をしているのだろう。やがて米粒より小さいかたつむりを持ってくる。「ほら先生、でんでん虫よ」一人二、三匹づつ手に乗せたり、葉っぱに乗せたりしてい

る。チャーんと殻がついて形がある。本当にこれがあのかたつむりになるのだろうか。子どもたちはどうやってこれを見つけたのだろうか。子どもの眼の不思議なこと。神様のこんな小さなものに迄届くこまやかさ。空を仰いだら真青な空に真白な雲が浮いている真夏の空だった。小と大と、ふっと襟を正す思いがした。

(6) 日曜学校(SS)一級(幼稚科)で時々スライド機を使いたいな、と思った。その思いが高じて手軽に持ち運びできる小型のものを買いたいな、と考えるようになった。昔(20cm×10cm×15cm)位の小型のスライド機を使ったことがあったのを思い出し、そういうのが欲しくてたまらなくなつた。店をのぞいたりしていたが、そんな小さいのはなかなかなくて、しかも高価。主人が林さんにきいたら、と言うのでさっそくきくと、真実な林さん、すぐカタログを持ってきて下さり、これが良い、フィルムがいたまない、画面が鮮明、ハロゲンランプを使っているので長持ちする、今なら特別な方法で四割引きで手に入る、と説明して下さい。すぐ飛びつく思いだったが、まてよこのことについて少しもお祈りしていなかった、SSの為にという思いで

先走っていたと気がつき一、二日返事を待ってもらった。祈り、もう一度カタログを見直す、すべて良いが大きい。32cm×12cm高さ26cm持ち運びに不便だ。戸畑伝道所に一台あるし、そうそう教会に古いのがあったはず、さがしてみようと思いついた。そこで主人から言われた、「保育所で必要なかと思っていた。SSで必要なら、榎本先生に、SSで使えます、幻灯機がほしいのですが、と最初から言えはよいのに、そしてまかせたら先生がよいことをして下さいるのに」と、あゝそうか、私は小型の自分の物が欲しいと必死に思っていた、たゞそれ丈だが。今安価で良いものが手に入るとてもよい時と思うが、教会のあるかもしれないし、これ丈のことを調べた後、白紙のような顔をして言えやしない、今回はご破算と、林さんに迷惑をかけたがおことわりをしてこのことは放棄した。主にまかせればよいのに、ついつい自分の慾、考えに走ってしまう。失敗の巻。

後日の話、教会の幻灯機を常に使える所に置いていたのだいた、なんでもないことでした。

(7) 子どもを保育して子どもを観察しているつもりでいるの

に、子どもの方から大人が見られているな、と感じることがよくある。一才すぎたばかりの子が、大人をよく見分ける、その人の持っているものをちゃんと知っていると驚くことがある。例えば一才八ヶ月のY君、保母の好みを実



にはつきりしている。誰からも好かれていないN保母に近づかない。手を出しても払いのける、好みの順番がきちんとついていて面白い。K君は受持の保母の言うことは絶対にきくが、他の人の言うことはきかず、甘えたり、自分のしたいことを押し通そうとする、相手を見分けて行動することを心得ているのだから負けてしまう。友達を叩きながら保母の顔を見たり、自分でころんだ時は少々傷ついても泣かないのに、友達がちょっとふれると大声で泣いたりする子がいる。子どもは純粹だ、と言いならされているだけに、通り越した無邪気さを感じる時、ふっと人間の本性を見るようで、空おそろしくなる事がある。大人の心を見すかされていると感じる時、あわててしまう。子どもの眼より、神様の眼はなにかも見通した。

ある日、ある時、さまざまのことを通して

神様はご自身をあらわそうとされています。

「背 広」

正 野 真 宏

私がまだ東京へ行っていた——たしか昭和五十年の話なんです。時は初夏の風がさわやかな六月、私は陽気に誘われるようにウキウキとあるデパートへ行きました。え、夏のストゥを買うためなんです。

そもそも東京なる所は、ハイセンスの人が多く、見る人どの人も知性と教養があふれているような服装をしています。

そこで私も向うをはって、幾分かでも知性と教養の足らざる所をカバーせんものと夏背広を買うことにしたわけなんです。幸い大売出しで沢山の背広がぶらさがっていました。生来私は買物が大の苦手、加えて私の体形が特製のヤセ型です、なかなか合うものがありません。袖丈に合わせると胸廻りと着丈が大きくなり、逆に胸廻りに合わせると袖丈が足りないという具合です。いろいろ着てみてさんさん迷った末、全体的には少し大きいなあとは思いましたが、袖丈が合うし、美人の店員さんが「合いますよ、合いますよ。」というので、私も鼻の下を長く買って帰ったのであります。

さて翌日、私はその背広を着てさっそうと出勤しました。

昼と何とやらは新しい方がよいとか世の中では申しませんが、背広の新しいのも晴れやかな気分になってよろしいですね。

職場の同僚が集まってきて、早速品評会がありました。ところがやっぱり大きいというのです。だいたい背広の胸廻りは握りこぶし一つか一つ半が入る余裕で丁度よいという。私のはこぶしどころか、小さな子供が一人入れそうです。それに袖丈は短かければ伸ばせるんだと言われて、しまった、又もや買いそこねたかと後悔しましたが、後の祭り。私の心は晴々からドン曇りとなりました。

その日の午後、用事で街に出ました。ファッションの街、赤坂です。大きなショウウインドウが並んでいます。そこには私の購買実力よりも一ケタも二ケタも違う高級品ばかりが陳列してありました。私は、それを見る格好をしながら、ウインドウにうつるわが姿を見ました。やっぱりどこかのお土産品のように——中味の割には包みが大きすぎます。そう思うといよいよ大きく見えてきました。余ったきれが行き場がなくてシワを作っておりますし、丈はお尻の下までたれ下がり、折からのいたずらな風が、そのたれ下がりやヒラヒラともて遊び、さらに背広いっぱい吹きつけて、まるでヨットの帆のように大きく大きく見せつけてゆきました。

「ははあ、背中が広く見えるから、これが本当の背広だわい。」と自らを慰めてみたものの効果ありません。風船のように体をいっばいふくらましてみてもはじまらない。ああ、なんと買物センスのない私なるかな！

私はこの背広を着ることが恥かしくなってきました。折角買った背広だけれど……もう着まいか……他の人にあげようかとも考えました。私は頭をたれたまま、道を急ぎました。

その時、小さな声が心にありました。「あなたは、あなたの背広をもっと愛さなければならぬ。」……私はハッとしました。そうなんです。この背広は、私が多くの中から選び出し、しかも相当の犠牲を払って私のものとしたのです。この背広は私に何の不都合もしたわけではありません。何の責任もないのです。それなのに私はこの背広を捨てようと思いました。なんと冷たい仕打ちでしょうか。

私は神様の前には背広にも劣る者であります。もし神様が、私と同じように自分の気に入らないからと無責任に捨てられる方だったとしたら……こんな者がクリスチャンと言われるのは私が恥かしい。私の名にかかわるから放り出してしまえと言われたとしたら、どうでしょうか。私は幾度となく主に

恥をかかせ、主の御心を痛めさせたかわかりませんから……。このような者をも主は憐んで、愛の故に忍耐して受入れ、着て下さっているではないか。あなたはなおこの背広を捨てて下さっているではないか。あなたはなおこの背広を捨てる気かと迫られたとき、主の十字架の御愛と共に、自分のあまりの自己中心的な考え、愛の足らざることを示され、背広に対しても相済まなくなつて悔い改めの祈りを捧げたのでした。

エッ、その後背広はどうしたかつて？ 勿論、着ていますよ。あの大東京の空の下、相変らずいたずらな風に「あゝセンスがない、センスがない。」とからかわれながらも、私は胸を張って愛用しているのです。ええ、結構私の身についてきましたし、役に立っていますよ。



主イエスを信ぜよ

原 田 駒 一 郎

招かるる者は多かれど

選ばれる者は少し

(マタイ二二・一四)

私は、昭和二十六年十二月現在の香月郵便局に転勤するまでは、故郷の大分県佐田郵便局に勤めていた。(大濠公園教会の藤掛さんとはこの局で奇しくも、数年間ご一緒だった。)

私が初めて聖書を手にしたのは小学校六年生の時で、級友から三冊の小冊子をもらったが、それが何の本であるかが判ったのは、六年位後の日出教会の門をたたいてからであった。

私が教会に行こうと決心(?)したのは、別段取立てて人生に悩んだ訳でもなく、半ば好奇心によるものだった。というのは、たしか昭和十九年頃だったと記憶しているが、「台湾からの引揚者の人が、生活に困って本を売りたいと言っているが、君も一冊買ってくれないかね」と、先輩から相談があったので、「それでは」ということになり、早速皆んなで行ってみるようになった。

ところが、当時私は、外勤の仕事をしていたので、どういふ理由か忘れたが一緒に行かれず、二時間余り遅れて行った。(今にして思えば神様のご計画だったのである。)

この引揚者という人は、台湾総督府の要職に在った人のご家族で、奥さんと娘二人の気の毒な生活であった。しかし、以前はそのような環境にあったので、世界文学全集とか、東洋何々とか言う本ばかりで、私が行った時は殆ど売り尽くされていた。

私は別段ほしい本があつて行つた訳でもないので帰りかけると、奥さんが出てこられて、「この本が一冊だけ残っていますすがいかがですか。」と声をかけられた。見るからに立派に装丁された本で、無学な自分にはとても興味のわきそうな本ではないように思えた。

しかし、折角持つて来られたので、無下に断る訳にもゆかず、また、相当困っておられることも聞いていたので、「頂きます」と言つて、何がしかの金を払つて買つて帰つた。私の買った本は翻訳もので、「クオヴアデス」という本であった。(この本は転勤の折に向うの公民館に寄贈して来た。) 私はこの一冊の本と出会うことにより、キリスト教とは、一体どんな宗教だろうかと、次第に興味を持つ様になつたの

である。教会に行ってみよう、と思うようになったのは丁度十八才の時であった。

一番近い教会がたまたま日出教会であったのでその教会を選んだ。当時の日出教会は、今は引退され別府市に住んでおられる吉良先生が牧会をされておられた。何も判らない私は教会に行きたい旨の手紙を出すと、折返し吉良先生からハガキに丁寧に便箋のように線を引き、几帳面な文字で書かれた返事が届いた。

「次の日曜日、立石駅に午前八時、内宮義信と言う人があなたを待っていますから、その人と一緒においで下さい。」という文面だったと記憶している。

昭和二十一年の秋私は初めて、内宮さんに伴なわれて、日出教会の礼拝に出席したのである。この内宮さんとは一年余り、ほとんど一緒に教会に行ったが、彼はその後、八幡製鉄所に入社のため私より数年早く八幡に来られた。その間文通をしていたので、彼から「よい教会が見つかったので、今その教会に行っている。」という意味のハガキが最後で、どういう理由からか記憶にないが文通は途絶えた。

その教会が前田教会であったことと、私が日出教会に行っていた当時同じ教会に河本さんご夫妻もご一緒だったことな

ど、後日知って、神様の摂理の深さを今更ながら驚きと感謝でいっぱいである。

それから、更に忘れられない事は藤掛さんとの出会いである。藤掛さんは私が日出教会に行くようになってから間もなく入局され、同じ職場で公私共に深いお交わりをいたゞいた。お宅は質素な引揚者住宅であったが、安佐津高原という、秋はとりわけすばらしい風景の一角にあり、四季折々に変化する、鶴見・由府の連峰が手の届きそうな所にあり、お宅の庭の一部のようであった。

ご一家には数限りない霊のお導きを受け、後日お宅が安佐津伝道所として用いられるようになり、この寒村にも福音が伝えられ、私を含めて数人の受洗者が与えられた。

その後、私が転勤し当地に来たが、藤掛さんご一家も私より一年余り後に、福岡市に転居され、安佐津伝道所も残念ながらなくなってしまった。

秋になると、今も思い起すのであるが、中秋の名月の夜、伝道所の廻りに咲き乱れていたキキョウ、オミナエシなど秋の花を眺めながら讚美した夕拝は忘れることができない。

帰郷の折、伝道所（藤掛さんのお宅跡）のあった場所を探してみたが、今は西日本一の「ぶどう団地」となって、一面

ぶどう畑で、どの辺だったかも知れなかつた。

前にも書いたように、私は昭和二十六年十二月転勤により当地に来てから、大濠公園教会を始め実に多くの教会に行つたが、昭和五十年六月十五日までの永きに亘り神に背を向け不信仰な日々を過したのである。

おもいはずるも はずかしや

父のみもとを はなれきて

あとなきゆめの あとを追ひ

むなしき幸を たのしみぬ

(讚美歌 二四五)

当時の私の心境を表現したこの一節であるが、実に愚かな時を過ごしたものである。ところが、このような私をも神はお見捨てにならなかつた。

忘れもしない、昭和五十年六月十四日の夕食の時に、当時高校生だった娘が「みんなで教会に行こう」と、ポツンと言つた一言がきっかけとなり、その夜、榎本先生にお電話したのである。

「実は、香月の原因と申しますか、藤掛さんの紹介で、前田教会に行きたいのですが……。」とお願ひし、教会の所在を教えて頂き、早速翌日の礼拝に親子三人で出席したのであ

る。

この時の「藤掛さんの紹介で……」は、確かではあつたがなんと二十二年前の紹介であつたのである。よくも平然として二、三日前のように言えたものだ、今にして思えばその時の自分をあきれ返るばかりである。

後日、「お証し」の折にこのことをお話しし、皆さんと大笑いしたものである。

私は、この教会で礼拝をかさねるうち、初めて十字架の救が、何であるかを示されて信ずることができた。

「主イエスを信ぜよ、然らば汝も

汝の家族も救はれん」 (使徒行伝十六・三一)

神様のお約束により、妻も大いなるみわざを以つて救われたことは感謝である。

いま東京に住んでいる一人娘も、近所の方々からよく「娘さん一人東京に住まわせてご心配でしょう。」と言われるのだが、私共 最善を為し給う主に心から信頼し、娘のことは、なげやりでなく、心から祈つて主にゆだねているので平安な毎日である。

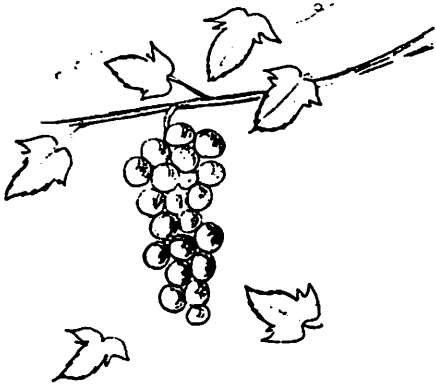
主にすがるわれに なやみはなし
十字架のみもとに 荷をおろせば

うたいつつあゆまん ハレルヤ ハレルヤ
うたいつつあゆまん この世のたびちを

(聖歌 四九八)

私共のひたすら祈りが届いて、やがて娘も救われ、主に
まみえる日が近いことを、どうか皆様もご加禱くださるよう
に切にお願い申し上げます。

いつも笑顔を絶やさず、礼拝に出席している私共にも、信
仰をゆるがす大きな主の訓練を受けたが、私は家内に、「神
様に近づくよい機会。」などと申して、自前の祈りをもって
遂にこの困難を乗り越えた証しもあるが、次号にゆずること
にする。



編集後記

- 今回も実り多いぶどうの木となりました。
- 投稿数では今までの最高です。
- 初めて投稿された方もおられます。
- きつと勇気を奮ってペンを執られたにちがいありません。文章の巧拙ではなく、気持のありのままを書かれたことが、読む人の琴線にふれるのでしよう。
- どれもすばらしいお証しとなりました。
- どうぞ次回も、新しい方の投稿をお待ちしています。
- 今回のカットは小松瑞枝姉が担当して下さいました。カット挿入には苦慮しておりましたところ、折に合う助けを与えられる神は、良き働き人を備えて下さいまして、心から感謝しております。

昭和五十七年一月

編集 正野

昭和57年8月25日発行

編集者 ぶどうの木委員会

発行者 基督伝道隊

榎本利三郎

印刷所 トンボ印刷所

発行所 基督伝道隊

福岡大濠公園教会

八幡前田教会

北九州市八幡東区前田1-10-3